葉山町 三ヶ岡（さんがおか）遺跡

砂丘に構築された古墳時代集落と平安時代の製塩遺構

（財）かながわ考古学財団

所 在 地　三浦郡葉山町一色字三ヶ岡2208-1
調査機関　（財）かながわ考古学財団
調査担当　長谷川厚・櫻井真貴
　　林原利明・宮井　香
調査目的　県立近代美術館新館建設にともなう事前調査
調査期間　平成12年４月13日～９月19日
　　平成13年１月10日～２月９日
調査面積　3,800㎡

第１図　遺跡位置図〔1/50,000〕

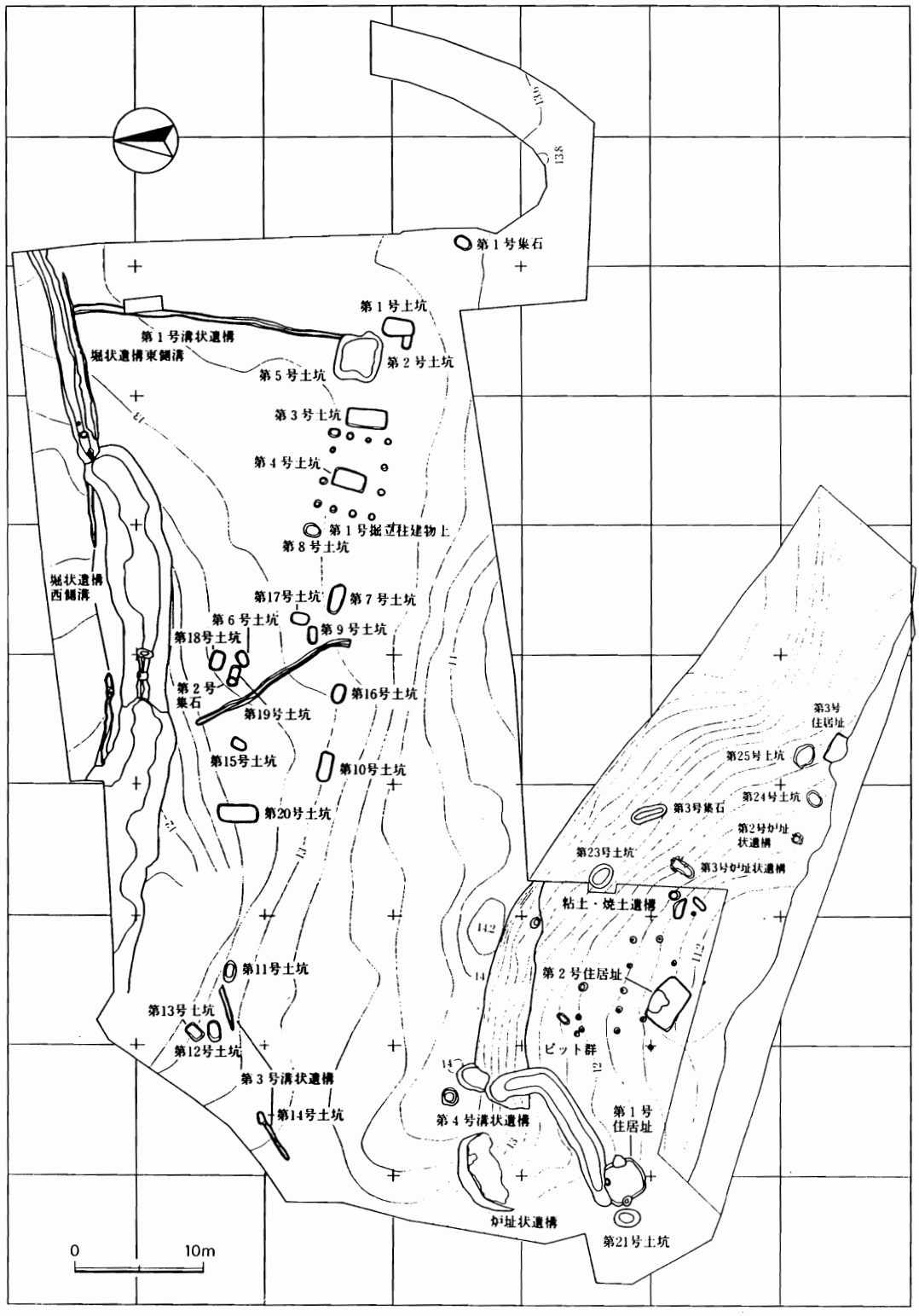
１．遺跡の立地

三ヶ岡遺跡は、三浦半島の相模湾岸の基部近くの葉山町の北部一色地区にに所在し、御用邸が位置する三浦丘陵からそぞく下山川の沖積地、河口先端の小磯の鼻と呼ばれる岩礁の基部から北西に湾曲する海岸線に平行して形成された２列の砂丘地帯に立地する。

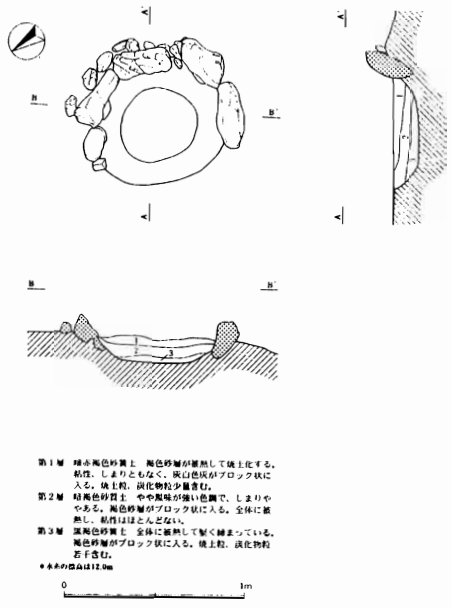
今回の発掘対象範囲は、湾曲してのびる海岸線に平行して形成された２列の砂丘うちの北西側の先端部の北側と南側の斜面に該当する。調査範囲の砂丘の最高点は標高14.2ｍで、北側との比高差は約３ｍ、南側は約3.5ｍで、比高差は著しく変わらないが、北側斜面は砂丘斜面と背後の丘陵部との間の形成された低湿な谷状の地形にかかり比較的傾斜をゆるく、南側の斜面はその南側の砂丘列の間に形成された凹地状の谷斜面に該当する。

２．調査経緯

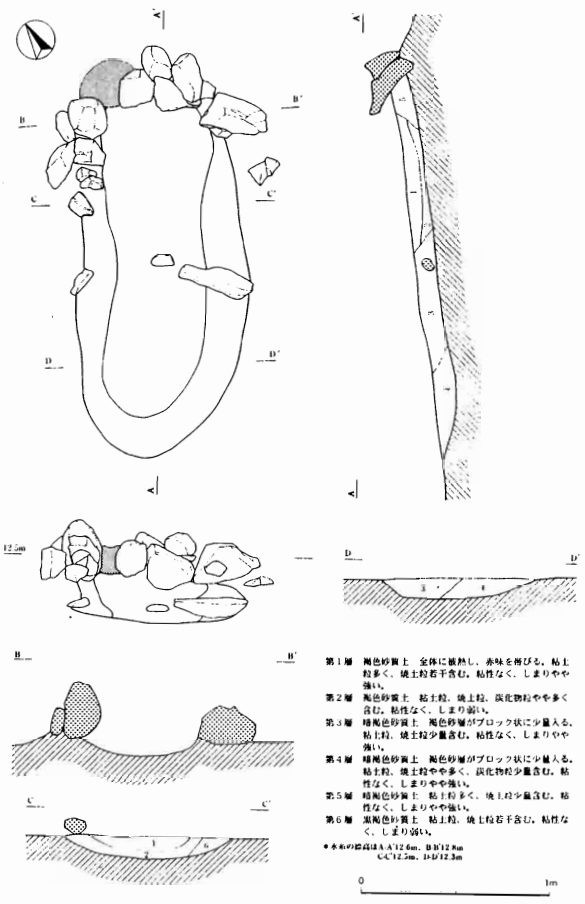
本遺跡の調査は、平成12年４～９月の６ヶ月と平成13年１～２月の１ヶ月の２回の調査に分けて行われた。平成12年４月からの調査は、砂丘斜面から北側の谷状の範囲を対象とし、砂丘斜面からは平安時代から古墳時代の遺構が検出された。平安時代の遺構は砂丘斜面寄りに土坑、集石、溝状遺構が検出され、古墳時代の遺構は砂丘斜面裾から谷状地形に堆積した黒色土の範囲にかけての北側寄りで検出された。遺構の主体は５世紀末から７世紀にかけての竪穴住居址で、等高線に平行する状態で一部が重複して19軒検出された。北側の調査区境界では、古墳時代前期の竪穴住居址１軒と遺物包含層が確認された。これら以外に近世以降の堀状遺構が調査区北側境界付近に湾曲する状態で発見された。



第2図　近世以降～平安時代の遺構配置

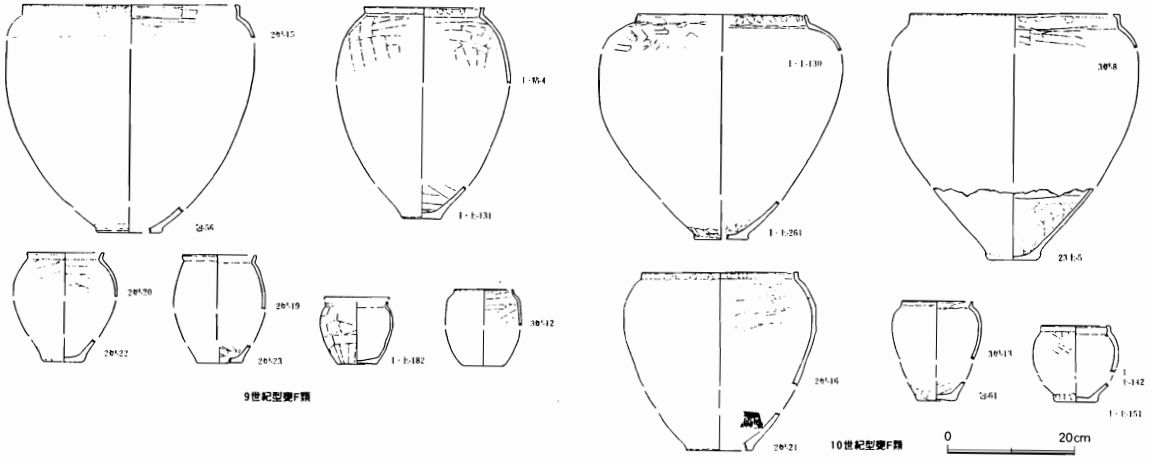


第２号炉址状遺構



第３号炉址状遺構

第３図　声援に冠する炉址状遺構



第４図　出土した製塩土器

また、砂丘斜面の南側の範囲では、斜面から火熱をうけた範囲と口縁部に独特の特徴をもち三浦半島を中心に分布する「類製塩土器」あるいは「三浦型甕」の破片が多量に廃棄された範囲が発見された。これらの遺構は伴出した須恵器坏、土師器坏、灰釉陶器から平安時代後期の年代が考えられ、斜面下方からは同時期の竪穴住居址２軒が検出された。

こうした発掘結果をうけ、砂丘南側の斜面にはこれら遺構に関連する遺構の存在と包含層が広がりが想定され、その後平成13年１月から試掘調査の結果をうけ、1.000㎡を対象に発掘調査を実施した。

発掘調査の結果、先の調査に連続する砂丘南側斜面から「製塩土器」を伴う石組むの炉址が竪穴住居址、土坑などの同時期の遺構とともに２基発見され、「製塩土器」とともに製塩に関連する施設を明らかにすることができた。

３．調査概要

近世以降

近世の遺構は調査区北側に接する状態で全長約42m、最大幅約５mの堀状遺構が検出された。溝底面にはしがらみ状の施設や曲物底板、下駄などの多数の木製品が出土し、遺構の形状とともに、これらの出土遺物からみて自然流路と考えるより、人工的な施設と考えるのが妥当と判断した。伴出した陶磁器の年代から江戸時代末期の構築時期が考えられ、明治年間に埋め立てられて調査前の現状に至っている。

平安時代

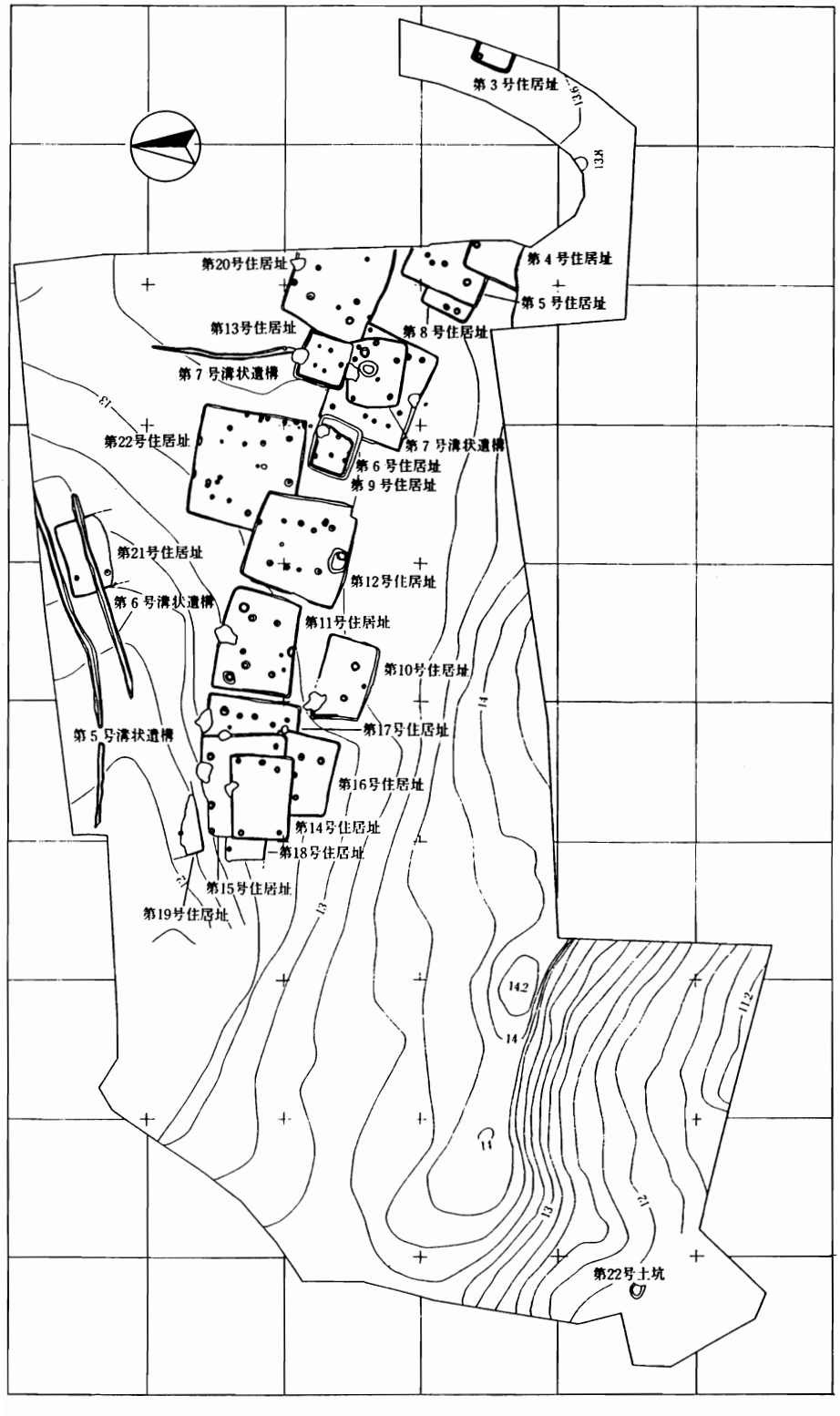
砂丘斜面北側では土坑、掘立柱建物址、集石、溝状遺構が、南側斜面では竪穴住居址３軒、炉址状遺構３基、土器廃棄遺構、土坑３基、ピット群などが検出された。３基の炉址状遺構は大形の１基は大半が崩落、消滅していたが、小形の２基は一方を開放した石組をめぐらす炉址で、覆土中および周辺からは焼土、炭化物とともに多量の三浦半島を中心として出土する独特の形態をもつ製塩土器が多数出土した。これら炉址状遺構の周辺の遺構も製塩に関連する作業に関連した遺構と考えられる。ただし、１基の土坑からは火葬骨が多量の破砕された製塩土器とともに検出されいること、炉址の規模や廃棄された土器量などから推測した生産規模などの点から、一元的な生産、流通を管理した専業性の強い製塩工房集団の存在を考えるには問題がある。これら遺構の時期は製塩土器と伴出した土師器、須恵器、灰釉陶器の年代から９世紀中葉から10世紀初頭の年代に比定できる。

古墳時代

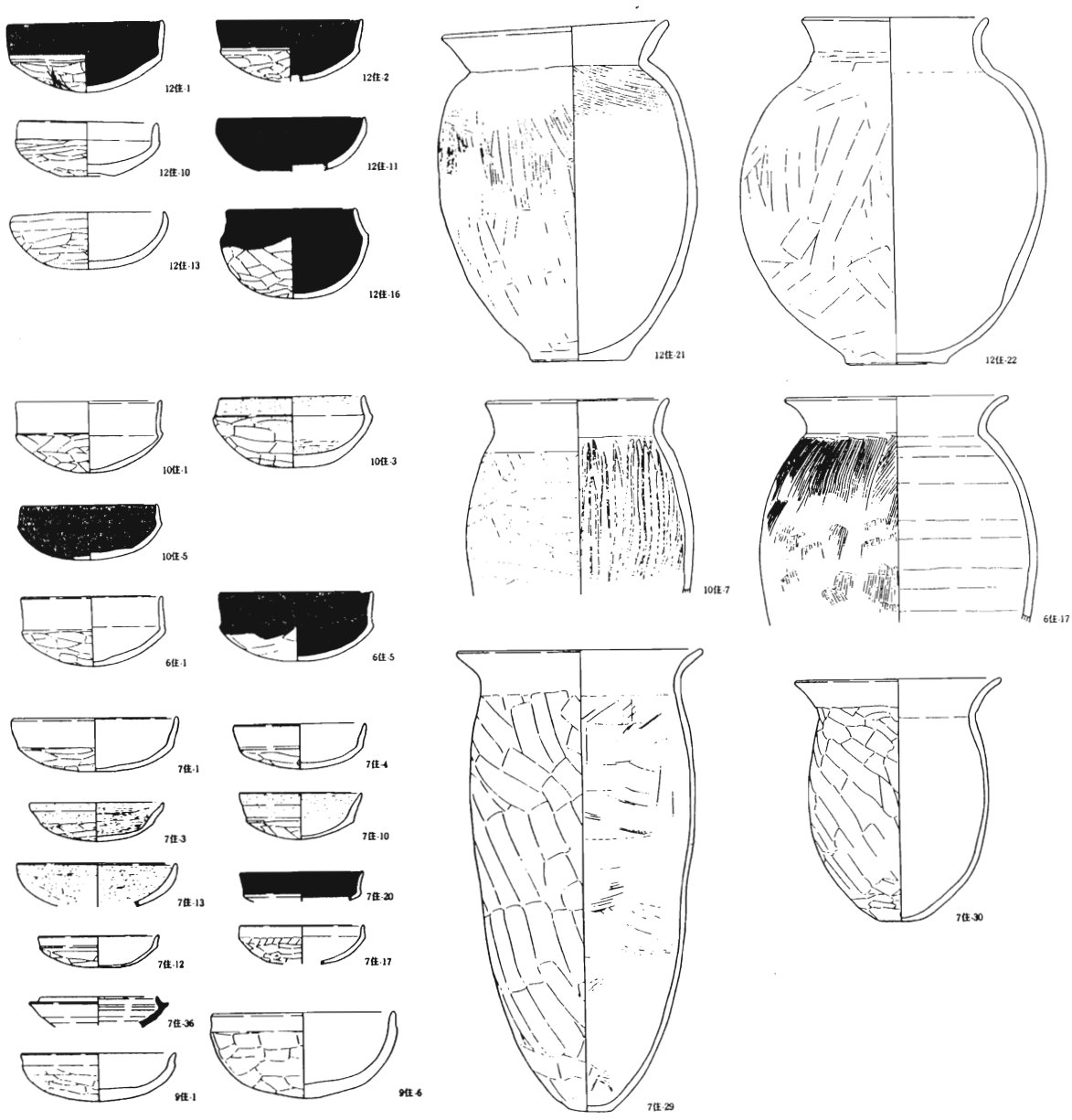
砂丘北側斜面と丘陵間の傾斜地から竪穴住居址20軒、溝状遺構３本、砂丘南側から土坑１基が検出された。竪穴住居址は19軒が５世紀末～７世紀末までの古墳時代後期から終末期にかかる時期に構築されたもので、１軒は古墳時代前期に該当する時期のものである。竪穴住居址は５世紀から６世紀中葉の比較的古い段階は一辺５～６mの大形のもので、７世紀代に入ると３m台の規模となる。覆土中から土師器坏、甕を中心に須恵器坏、甕、紡錘車などが出土した。古墳時代前期の単独で住居址、土坑が検出されている他に、調査範囲の北東側に包含層が形成されていた。出土した土器の特徴から４世紀代を中心とした年代と考えられる。

４．まとめ

本遺跡での成果としては、古墳時代では県内でも類例が少ない海岸線から約150mと近接した砂丘斜面に立地す集落が発見されたことと、特に注目すべき点としては従来から集落等で出土し、その形態的特徴から平安時代を中心とす



第５図　古墳時代の遺構配置



第６図　古墳時代竪穴住居址出土土器〔1/6〕

る年代の製塩土器と考えられていた土器が、今回の調査で生産址とともにその近辺から多量に廃棄された状態でが発見されたことで、この土器が少なくとも９～10世紀までに製塩に係わっていたことが証明されたことが大きな成果とした挙げられる。ただし、近接して構築された竪穴住居址からも同形態の煮炊に利用した甕も出土しており、製塩に関わる人々の生活に密接に関連していた土器である側面も推測される。

（文責：長谷川厚）

文献

かながわ考古学財団　2001　「三ヶ岡遺跡Ⅰ」かながわ考古学財団調査報告111

かながわ考古学財団　2001　「三ヶ岡遺跡Ⅱ」かながわ考古学財団調査報告118

小田原市 永塚下り畑遺跡

― 道路遺構を中心に ―

齋木秀雄・降矢順子

所 在 地 小田原市永塚下り畑408外
調査機関 小田原市下曽我遺跡発掘調査団
調査担当 齋木秀雄・降矢順子
調査目的 社会福祉施設建設に伴う発掘調査
調査期間 2000年７月24日～11月22日
調査面積 515㎡

第１図 調査区位置図

１．遺跡の立地

調査地点は、酒匂川の左岸に南北に連なる永塚、千代、高田の3台地の内、最も北の永塚台地上に位置する。

調査地点の位置する足柄平野は7世紀には相模國足柄評であったが、大宝令施行前に足柄上評・足柄下評に分かれ、大宝令施行後の足上郡、足下郡へと継承されていく（荒井1993）。その際、上下の分割線に東海道が比定されている。調査地点周辺は足下郡の最北端にあたるため、東海道の近くに位置することになる。

本地点の東に位置する下曽我遺跡は、過去の調査において木簡や「寺」「門」「大家」等の墨書土器が出土し、官衙関連遺跡の可能性が指摘されている（鈴木1991）。永塚台地の南にある千代台地には、早くから初期寺院の存在が知られていた。また、近年の調査では木簡や「廚」銘墨書土器の出土が加わり、郡衙（足下郡衙）の存在も検討されるようになった。さらに、南の相模湾に面した低地には三ツ俣遺跡があり、畿内産土器や石帯、瓦等の特殊遺物が出土している。

２．調査経緯

本地点の調査は社会福祉施設建設に伴う事前調査として実施された。本調査に先立つ試掘調査は平成12年6月に、建設予定地内3箇所で、小田原市教育委員会が行った。その結果、遺構・遺物が確認された。永塚下り畑遺跡と道路を隔てた下曽我遺跡でも、同事業者が、同様の建物を建設する計画があったため、試掘調査が同時に行われた。その結果、下曽我遺跡に於いても木材を使用した遺構が確認された。また、下曽我遺跡内の建物建設予定地内には、1961年に國學院大学が発掘調査を行い木簡などが出土した井戸址が在り、位置を表示する標識が建てられていた。

試掘調査の結果を受け、小田原市教育委員会と事業主体者との協議が行われ、その結果、事業主体者から委託を受けた小田原市下曽我遺跡発掘調査団（団長：齋木秀雄）により、建物建設工事に先立って、永塚下り畑遺跡と下曽我遺跡の両地点の記録保存調査を実施する運びとなった。特に、

下曽我遺跡では、建設範囲内の埋蔵文化財調査の他に、先に國學院大学で調査し、保存のため埋め戻されていた井戸の再調査を行うこととなった。

3．調査概要

主に永塚下り畑遺跡の成果について触れる。今回の調査で確認された遺構は、古墳時代前期、古代（奈良・平安）時代、中世の3時期である。検出遺構・遺物は次の通り。

古墳時代前期	竪穴住居址7軒、土壙、ピット。土器、琴柱状垂飾品、重圏文放製鏡（古代住居の覆土から出土）他。
古代	竪穴住居址22軒、道路3条、溝、土壙。土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦、墨書土器、鉄斧、鍵、紡錘車他。
中世	銅銭（嘉泰通宝）1枚

［道路遺構］

永塚下り畑遺跡では道路あるいは道路状遺構が3条確認されているが、ここでは新聞でも報道された。道路1を中心に報告する。

道路1の概要

・形状：　両側に溝を持つ（東側は不明瞭）
・調査区内の確認長：　約11m
・幅：　全幅4.5m　　路肩幅：　2.6～2.7m
・方向：　N-32°-E
・3時期使用されている。
・最下面の3面道路が舗装されている。
・3面道路の年代：　9世紀代
　　（3溝に西側側溝が切られる。）
・舗装土器片他の数

須恵器・灰釉	664
土師器	4220
石	1316
計	6200

　　約210／1㎡
・道路起点：　郡の中心？

4．まとめ

舗装された道路は、舗装という名称の可否はおいて、極めて貴重な遺構であると同時に簡単には出来ない道路でもある。

仮にこの道路が千代台地の寺院を起点としていると仮定すると、寺院から調査地点までは約460mある。これは検出した道路の約42倍にあたるから、検出した土器片等を42倍すると約24万片の土器片他が必要になる。この量は集落単位で行う収集・作業量を遙かに越えている。とすれば、道路の建設は、少なくとも郡単位で行った可能性が高い。しかし現在のところ、周辺でのこの舗装された道路の検出報告は無いため、あくまでも仮定の数値である。

中世の鎌倉では、同じ道路でも調査地点によって多量のかわらけ細片が路面上に廃棄されている場合には、道路（あるいは道路周辺）の性格の差がでているものと考えている。

今回の、舗装された道路の意味は、永塚下り畑遺跡と下曽我遺跡（本来は同一遺跡）の性格を合わせて考える必要がある。相模湾に面した三ツ俣遺跡を郡津に想定すると下曽我遺跡は森戸川を仲介とした内津と考える説もある。（田尾2000）

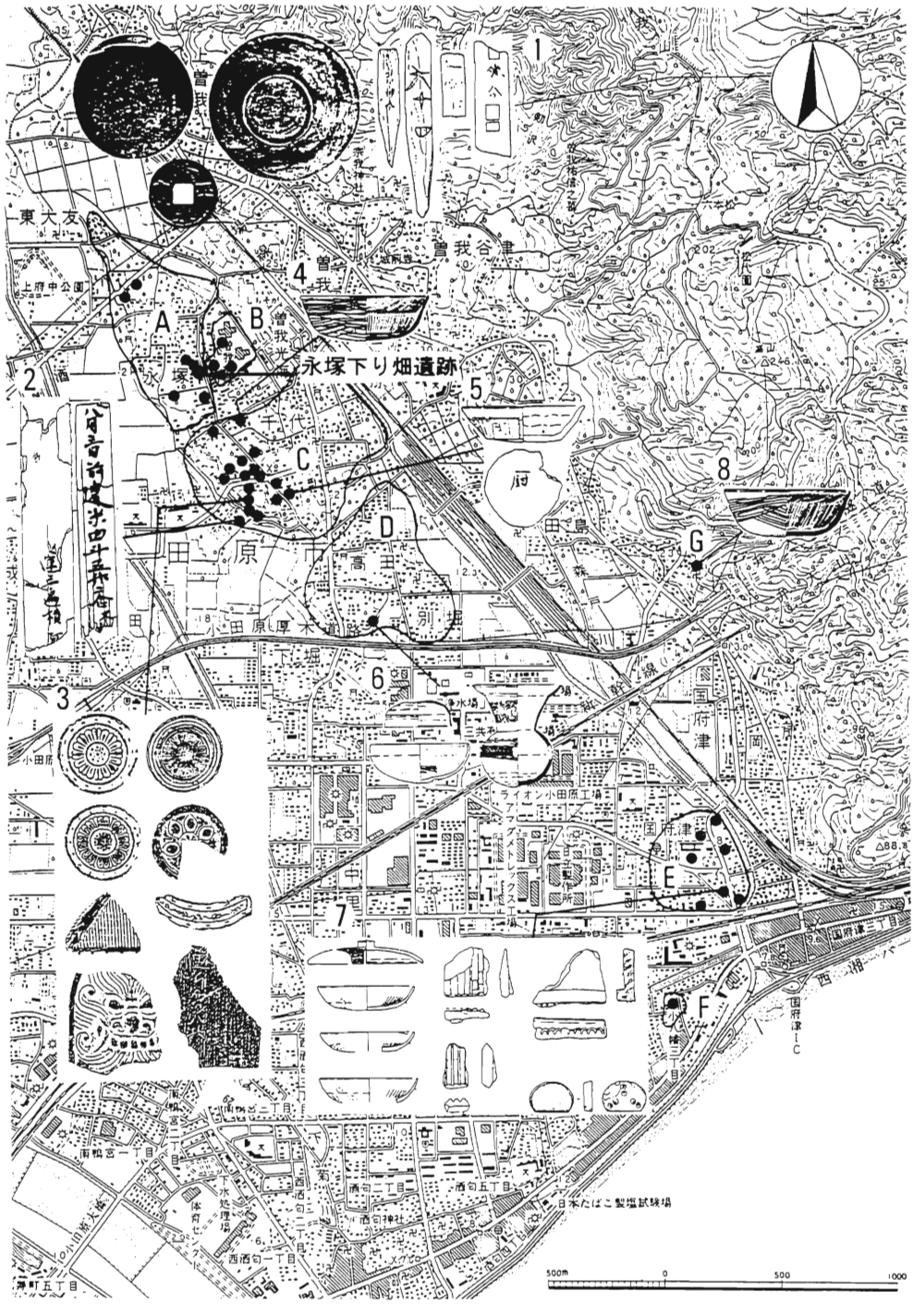
文献

荒井秀規　1993　「相模国足柄評の上下分割をめぐって」『市史研究あしがら』第5号　南足柄　市史編纂委員会

大島慎一・田尾誠敏　2000『千代北町遺跡第Ⅶ地点』小田原市教育委員会

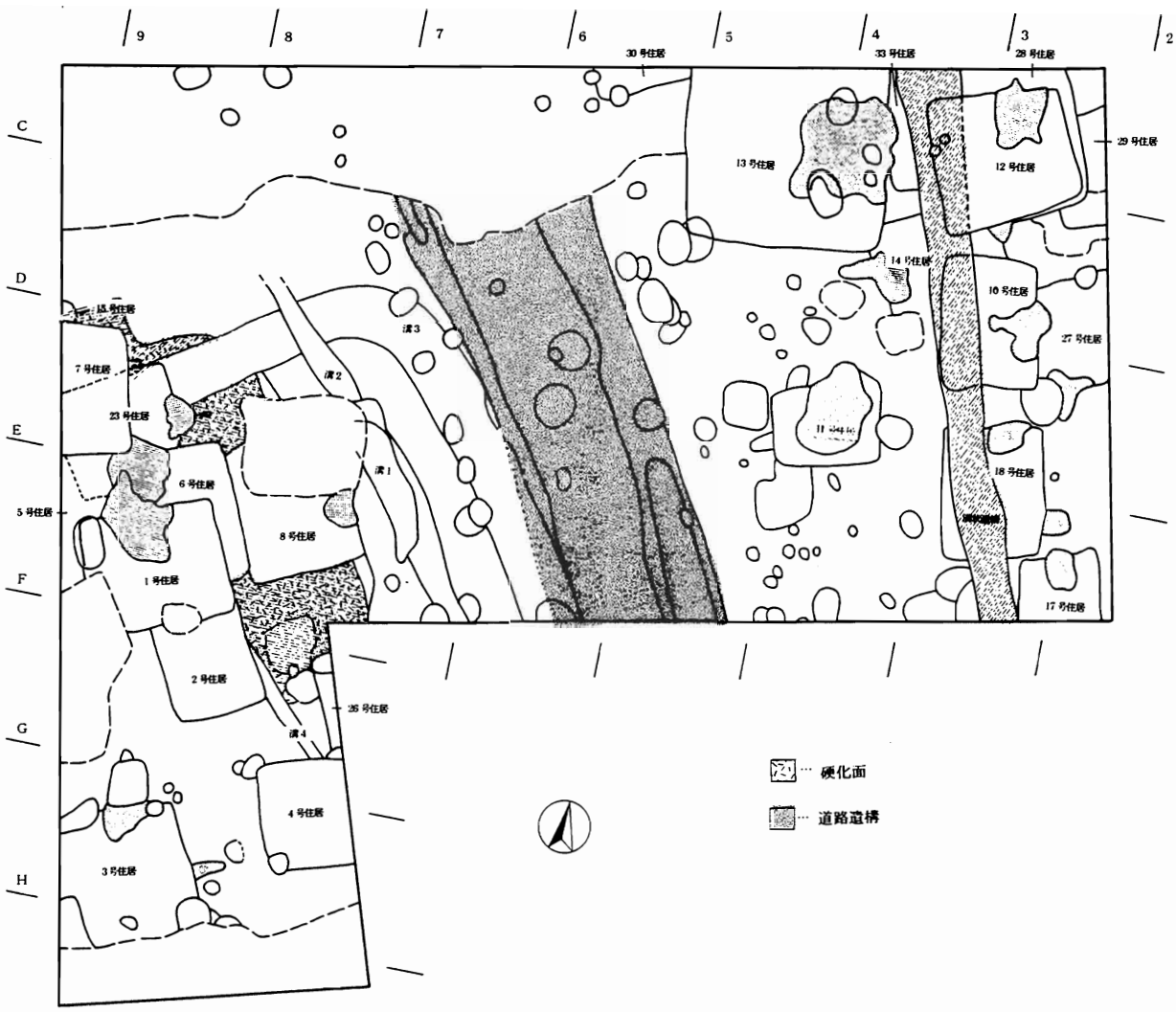
鈴木靖民　1991　「下曽我遺跡と出土木簡」『木簡研究』13号　木簡学会

田尾誠敏　2000　「小田原の古代遺跡」『神奈川県地域史研究』第18号神奈川県地域史研究会

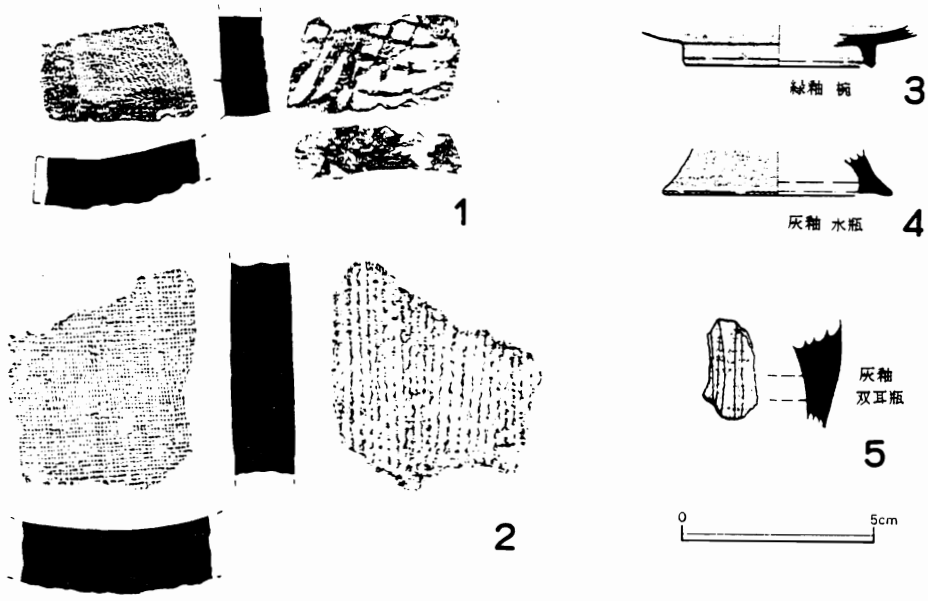


A．永塚遺跡〔集落〕　B．下曽我遺跡〔官衙関連／内津？〕
C．千代遺跡〔官衙関連／郡衙・寺院、７世紀までの集落〕
D．高田遺跡〔集落〕　E．三ッ俣遺跡〔津？、集落〕
F．小八幡遺跡〔集落〕　G．田島横穴墓群〔７世紀の墓域〕
1．下曽我遺跡の木簡と墨書土器　2．千代南原遺跡の木簡　3．千代廃寺の瓦
4．千代光海端遺跡の畿内産土師器坏　5．千代仲ノ町遺跡の「厨」銘墨書土器
6．いち早く集落が形成された高田遺跡の５～６世紀の土器
7．三ッ俣遺跡の特殊遺物〔畿内産土師器・瓦塔・石帯〕
8．田島横穴 11 号墓の畿内産土師器坏

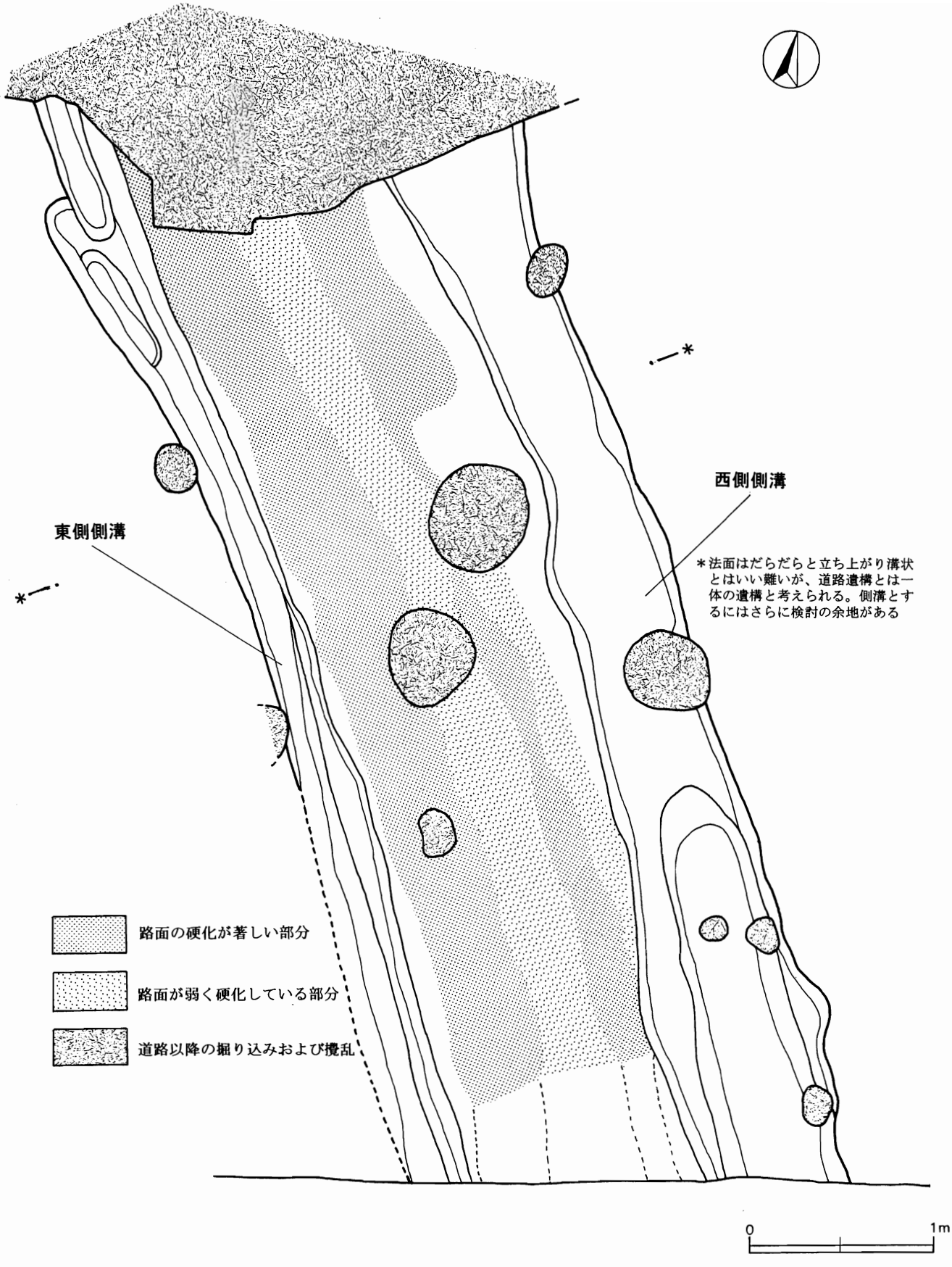
第１図　永塚下り畑遺跡と周辺の遺跡〔1/3000〕および特殊遺物（大島・田尾2000より）



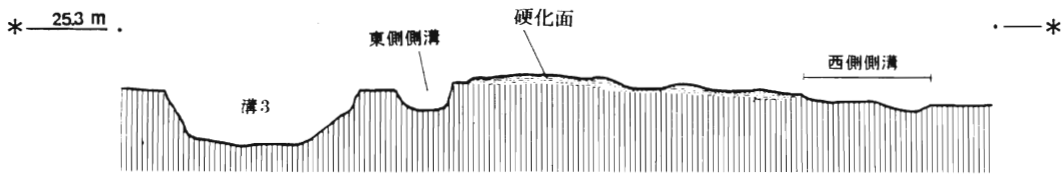
第2図　遺構全体図（奈良・平安時代）〔1/200〕

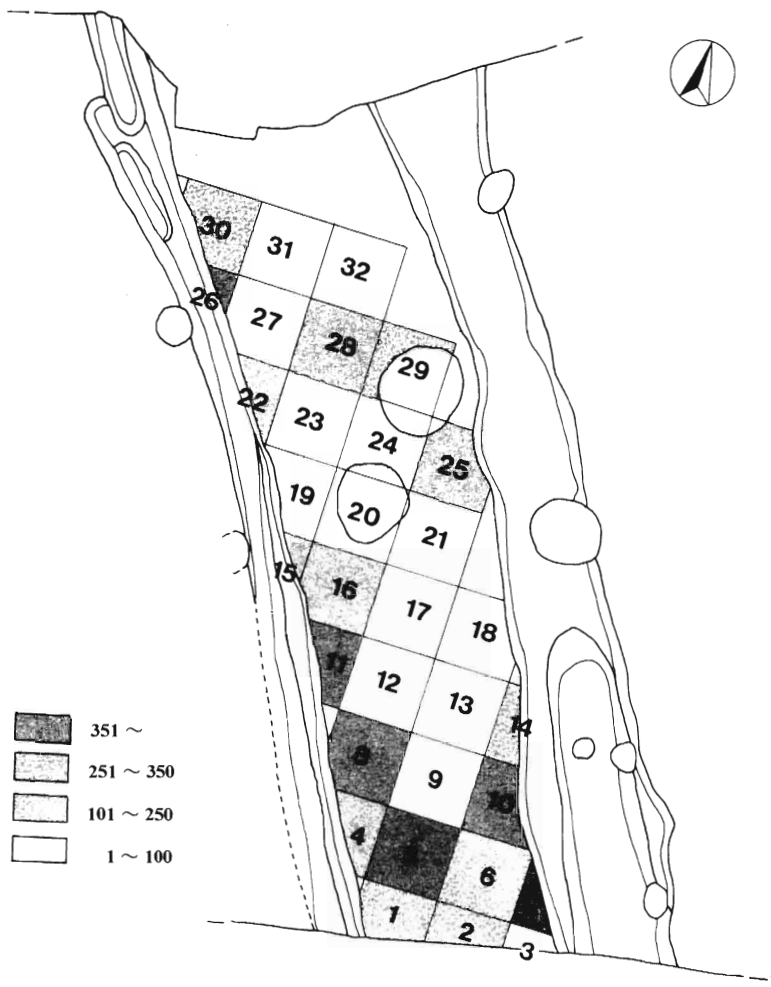


第3図　道路遺構出土遺物〔1/4〕



第４図　道路遺構３面全体図〔1/60〕





第５図　道路遺構３面舗装材分布状況〔1/100〕

第１表　永塚下り畑遺跡道路遺構３面舗装材一覧

単位：個

舗装材の大きさは直方体の場合、長辺が基準

グリッド	須恵器・灰釉陶器				土師器				石				計
	~1cm	1~2cm	2~3cm	3cm~	~1cm	1~2cm	2~3cm	3cm~	~1cm	1~2cm	2~3cm	3cm~	
1	4	14	10	4	2	19	75	33	3	15	12	7	198
2	1	12	4	2	65	95	9	4	16	34	4	3	249
3	0	0	0	0	1	2	1	0	0	0	1	1	6
4	0	10	11	7	26	121	31	5	2	23	19	7	262
5	5	31	18	7	104	206	34	4	57	79	14	6	565
6	0	3	1	3	16	92	15	10	1	9	3	0	153
7	0	44	21	21	62	187	36	9	5	37	26	10	458
8	2	14	15	5	98	146	21	3	12	51	17	5	389
9	0	2	0	0	9	7	3	2	0	2	2	0	27
10	1	12	15	13	53	234	41	6	4	48	17	9	453
11	0	7	21	18	13	236	77	14	6	35	37	15	479
12	0	2	2	1	8	25	6	2	0	4	1	0	51
13	0	0	2	0	5	34	7	2	0	3	1	1	55
14	0	7	5	3	39	62	17	2	8	20	3	2	168
15	0	29	11	6	33	158	37	4	6	33	8	2	327
16	3	15	5	5	45	106	25	4	10	18	8	8	252
17	3	14	9	3	16	33	13	2	5	15	4	2	119
18	0	0	1	0	3	8	0	0	0	1	0	0	13
19	0	10	7	3	3	22	2	2	19	111	19	5	203
20	0	0	1	0	4	5	3	1	0	0	0	0	14
21	0	0	2	0	3	3	0	0	0	2	0	0	10
22	0	0	1	0	9	16	10	7	0	2	1	2	48
23	0	1	6	0	2	39	9	2	0	1	3	1	64
24	0	7	6	3	41	58	12	3	8	21	4	4	167
25	3	7	10	5	40	178	51	10	2	21	10	9	346
26	0	13	19	7	68	188	64	17	5	99	20	13	513
27	0	5	4	1	16	21	7	0	0	8	2	3	67
28	1	16	16	5	123	53	46	20	16	41	5	5	347
29	0	2	11	6	7	51	21	6	0	8	12	5	129
30	0	0	0	0	7	1	3	1	0	0	0	0	12
31	0	1	0	0	4	12	6	0	0	0	0	2	25
32	0	1	0	0	1	16	1	2	0	5	4	1	31
計	23	279	234	128	926	2434	683	177	185	746	257	128	
				664				4220				1316	6200

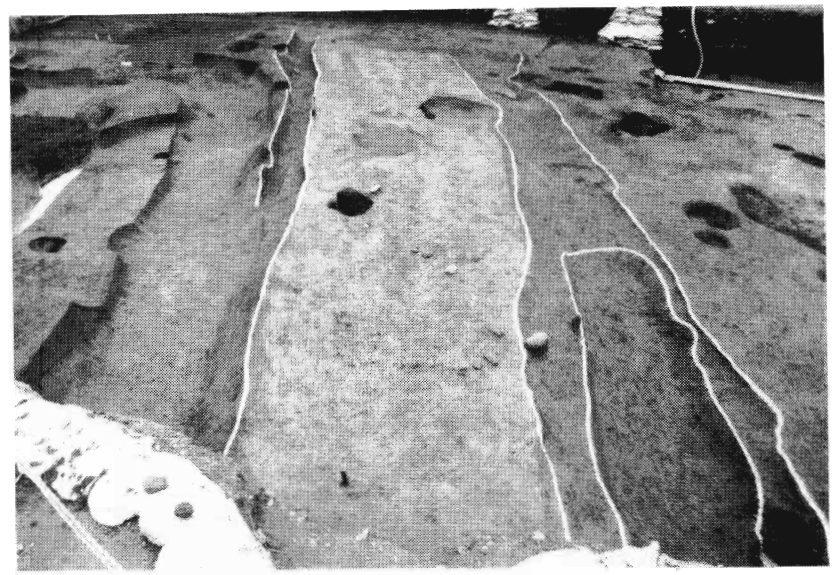


写真１　永塚下り畑遺跡道路１（３面・南から）

写真２　道路舗装面の状況

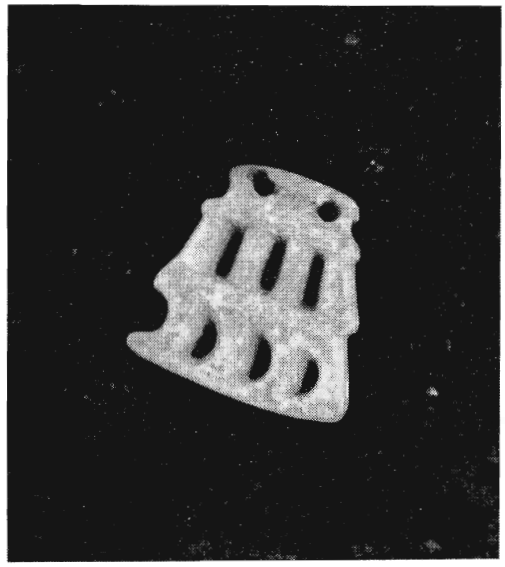


写真３　琴柱状垂飾品

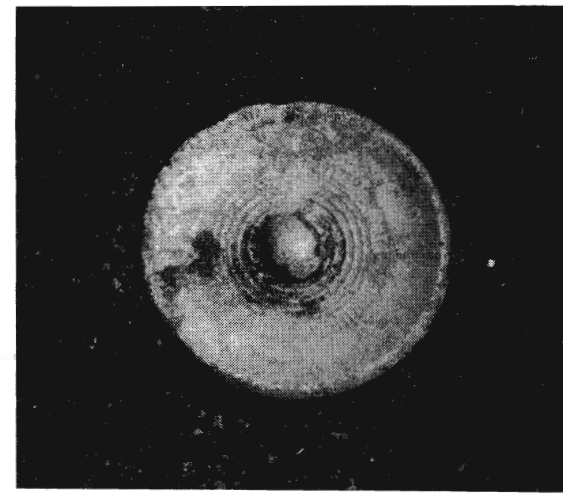


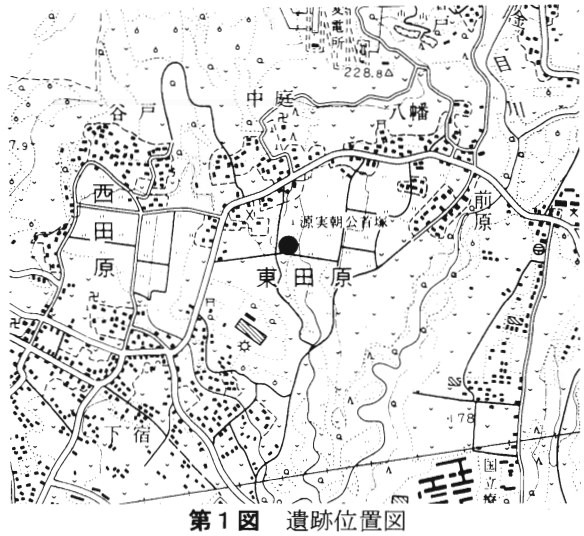
写真４　重圏文放製鏡

秦野市 東田原中丸遺跡

― 中世の波多野氏居館跡と考えられる建物群 ―

霜出 俊浩

所 在 地 秦野市東田原字1,019番他
調査機関 秦野市内埋蔵文化財調査会
調査担当 苅谷史穂
調査目的 田原ふるさと公園中丸広場整備事業に伴う発掘調査
調査期間 2000年９月25日～2001年２月28日
調査面積 約2,000㎡



第１図 遺跡位置図

１．遺跡の立地

本遺跡の所在する秦野市東田原地区は、秦野盆地の北東端に位置します。秦野盆地の北部では、周辺に降った雨水を集めた河川が北西方向から南東方向に向かって流れており、本遺跡は盆地の最東端を南下する金目川に注ぎ込む支流が形成した舌状台地上に立地しています。北から南に向けて伸びるこの舌状台地は標高約150ｍで、その東西には金目川の支流を水源とする水田が広がっています。

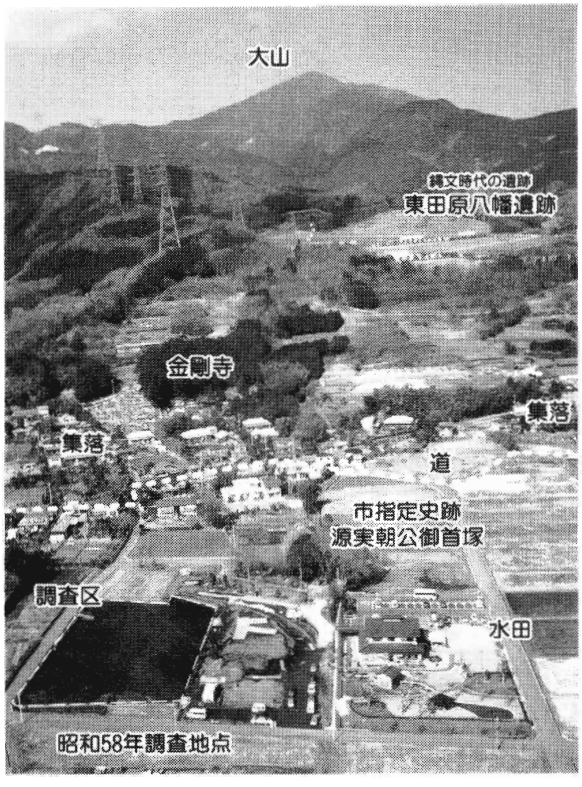


写真１ 遺跡の周辺風景（南から）

今回の調査区は、緩やかに東に向かって傾斜しています。調査区のすぐ北東には、秦野市の指定史跡である「源実朝公御首塚」が所在しており、首塚の北方約300mの地点には鎌倉時代に創建したとの伝承が残る金剛寺があります。また、本遺跡の北には縄文時代前期にさかのぼる東田原八幡遺跡が丹沢山地中にあります。

本遺跡では、農業構造改善事業に伴う発掘調査が1983年７月から９月にかけて今回の調査区の南側で行われました（以下「昭和58年調査」といいます）。この調査により縄文時代、古墳時代前期及び中世期（室町時代後半）の遺構・遺物が確認されています。特に、古墳時代の集落としては盆

地の中でも最も古い時期に位置付けられることができ、盆地内の開拓の歴史を示唆する情報を提供しました。

写真２　遺跡の周辺風景（北西から）

２．調査経緯

秦野市は、東田原地区に田原ふるさと公園中丸広場整備事業を計画しました。しかし、事業予定地には秦野市№102東田原中丸遺跡が所在し、事業がこの遺跡に対して大きな影響を与えるとの判断から、記録保存のための発掘調査を実施するになりました。発掘調査は工事により損壊する事業地の西側約2,000㎡を調査区として設定し、影響の少ない東側は調査区からは除外しました。

今回の調査区は、昭和58年調査のすぐ北側に位置するため、出土する遺構・遺物は昭和58年調査とほとんど変わらないものであろうと考えていました。しかし、調査を進める中で中世前期と思われる遺構・遺物が出土したため、関係機関からの助言を受けました。その結果、中世領主の館が所在する可能性があるとして記者発表するとともに、見学会を開催しました。また、本遺跡の重要性から秦野市は設計を一部変更し、中世遺構集中区を盛土して保存することにしました。

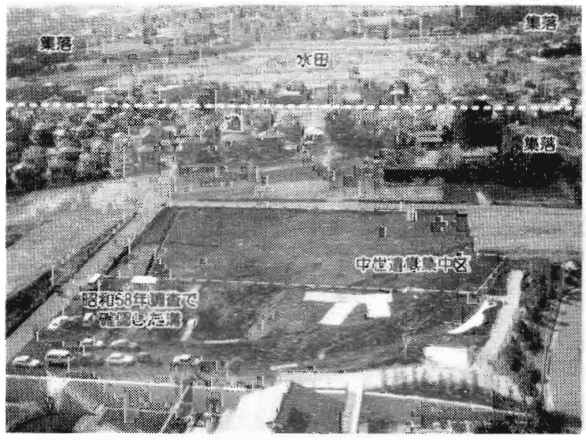


写真３　遺跡の周辺風景（東から）

３．調査概要

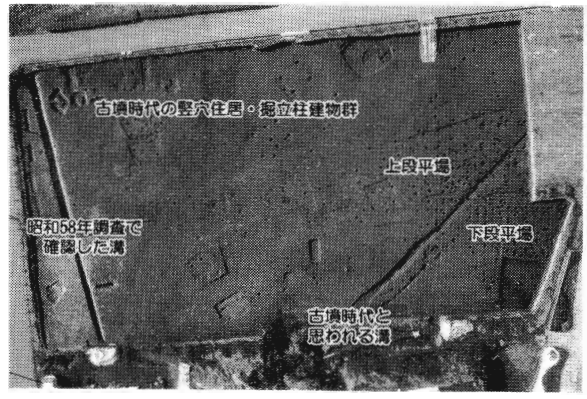


写真４　調査区全景（右が北）

今回の調査では古墳時代の竪穴住居や掘立柱建物、中世期に造成された遺構群が出土しました。

特に中世期の遺構としては、上下２段の平場とそこに配置される20棟の掘立柱建物群、その掘立柱建物の柱穴を埋めて営まれた鍛冶関連と考えられる複数の焼土が確認されました。

ここでは調査中の所見と航空写真の観察をもとに中世前期の遺構群について紹介します。

航空写真を観察すると、軸の傾きから建物及び平場をＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄの４群に分けることができました。

Ａ群としてまとめた遺構群としては、上段の平場を中心に４棟の建物を想定しました。１棟は２間×３間の総柱の母屋に半間の４面庇がつく建物です。その北隣の建物は調査区外に伸びているため全容は不明ながら同様の２間×３間の４面庇の総柱建物である可能性があります。その他に西面庇を持つ１間×３間の建物と２間×４間の総柱建物を認めました。

Ｂ群はＡ群よりやや西に傾いた軸を持つ遺構群で、上段の平場と８棟の掘立柱建物を想定しました。ここでも２間×３間の４面庇の総柱建物、東西２面の庇を持つ２間×４間の総柱建物、３間×５間の総柱建物と小規模な建物５棟を認めました。

Ｃ群はＡ群より東に傾く軸を持つ遺構群です。ここでも２間×３間の４面庇の総柱建物を１棟想定しています。

Ｄ群はＣ群よりも更にやや東に傾く軸を持つ一群の建物と下段の平場を想定しました。２間×３間の４面庇の総柱と思われる２棟の建物、２間×３間で２面庇の総柱と思われる建物１棟、庇を持たない２間×３間の総柱と思われる３棟の建物を認めました。。

これらの個々の遺構について、検討を加えていないため建物の詳細な年代を述べることはできませんが、調査中の所見からＡ群の２間×３間の４面庇の総柱建物よりＢ群の３間×５間の総柱建物が新しいと見ており、Ａ群→Ｂ群という遺構の変遷があったのではないかと考えています。また、建物群の柱穴の深さから考えるとＡ・Ｂ群→Ｃ・Ｄ群という変遷があるのではないかと想定しています。

なお、今回想定した建物群の柱穴間の距離はその多くが1.5m、1.8m、2.1m、2.4mというように約30cmの倍数で作られていました。

今回の調査区の南側に東西に伸びる溝は、断面がＶ字状で、昭和58年調査で確認されたものです。報告書では「Ｖ字溝」として古墳時代前期の土師器片が出土した同時期の遺構として掲載されています。ただ、この遺構の軸がＢ群の軸と直行していることから、中世遺構との関係があるのではないかと考えています。

中世遺構集中区の出土遺物としては、かわらけをあげることができます。写真９に示した「かわ

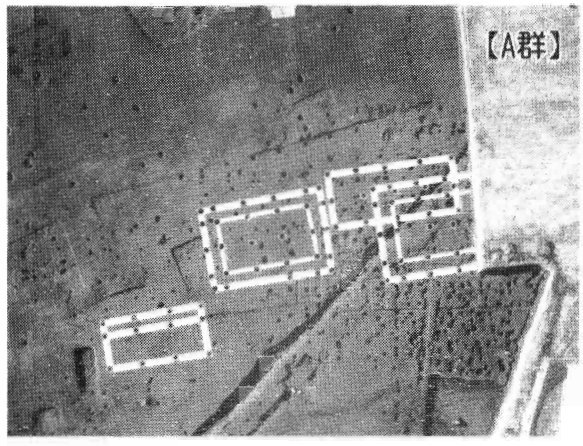


写真５　中世遺構集中区A群

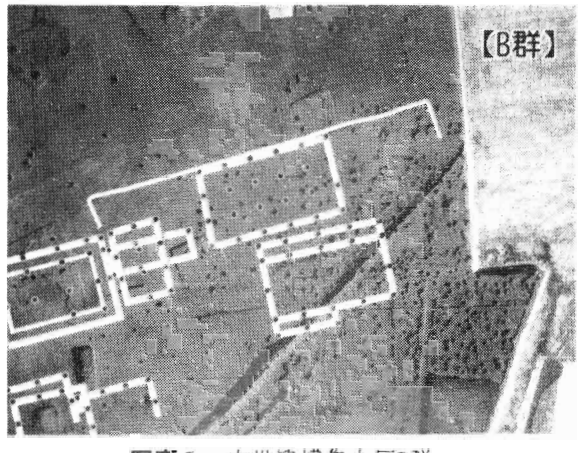


写真６　中世遺構集中区B群

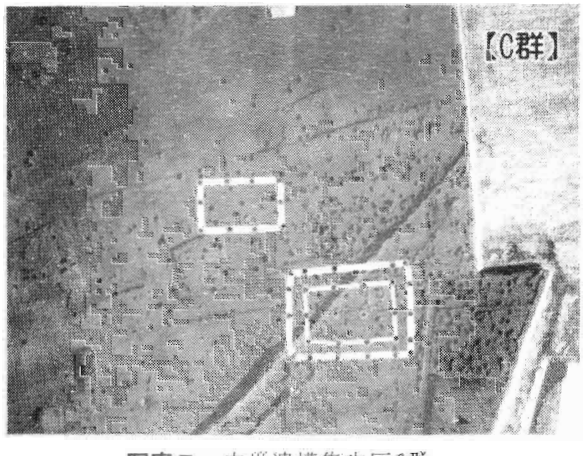


写真７　中世遺構集中区C群

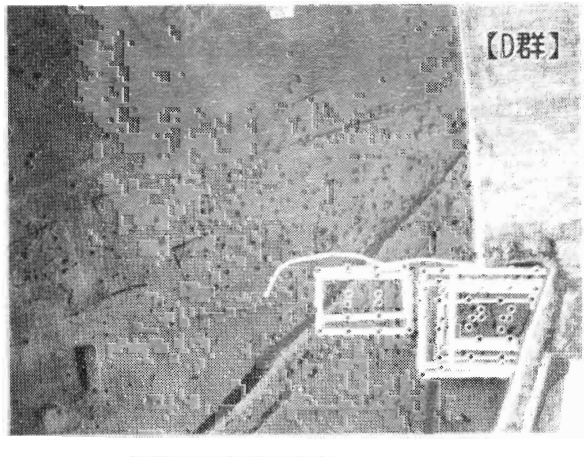


写真８　中世遺構集中区D群

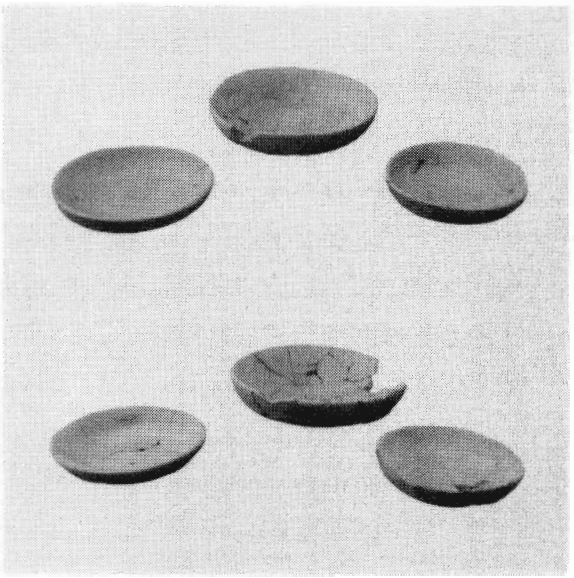


写真９　出土した「かわらけ」

らけ」のうち上の３点は底に回転糸切痕を残すのもので、下の３点は底部を手ごね痕を残すものです。今回の調査により実測が可能な「かわらけ」が30個体程度出土しています。また、県西部では出土例がないと言われている「白かわらけ」が５個体程度出土しています。これらの土器類は、多くが鎌倉から搬入されたものと考えられます。

中国陶磁器としては、白磁・青磁が破片ではありますが出土しています。そのほか渥美窯や常滑窯で作られた国産陶器も出土しています。

これらの出土遺物のうち、中国陶磁器については11世紀後半から12世紀代にかけて流通したもの、国産陶器については12世紀後半から13世紀前葉に流通したもの、「かわらけ」等の土器類については13世紀前葉から中葉に位置付けられるものが主体となっていました。

４. 遺跡の性格

規模の大きい造成工事を伴う上下２段の平場や４面庇総柱の掘立柱建物等の遺構、それに伴って出土する陶磁器等の遺物から、今回出土した遺構群は、在地領主の館跡と考えることができます。また、出土遺物が古代末から中世前期という年代を示し、かつ、鎌倉で出土する「かわらけ」と異なるものではないことから、当時、鎌倉地域との交流があった人物あるいは氏族がこの館に関係していたと考えることができます。『吾妻鏡』では秦野地域に関係する御家人として波多野氏を見ることができます。波多野氏は藤原秀郷を先祖とし、平安時代中期以降に秦野盆地の領主として土着し、「波多野」を名乗ったといわれています。なお、一族には保元の乱に従軍した義通や曹洞宗の本山永平寺を建立した義重がいます。

このような点から、本遺跡は平安時代末から鎌倉時代前半にかけての波多野氏居館である可能性が高い遺跡であると位置付けることができます。

なお、前述したように秦野市はこの遺跡の重要性から主要部分については盛土により遺構の保存を図りました。また、今回の調査は部分的ものであるため、今後は全容の解明に向け引き続き調査を実施していくことにしています。

今回の調査中には、昭和58年に本遺跡を調査された安藤文一氏やかながわ考古学財団の御堂島正氏、宍戸信吾氏、宗臺富貴子氏にご指導、ご協力をいただいたほか、同財団の服部実喜氏にあっては、遺物の鑑定や遺跡の性格について多大なる助言をいただきました。厚くお礼申し上げます。

文献

安藤文一　1989『東田原中丸遺跡』秦野の文化財第22集

服部実喜　2001「南関東地域における中近世建物遺構の変遷」『埋もれた中近世の住まい』

鎌倉大仏周辺の調査

― 大仏殿遺構を確認 ―

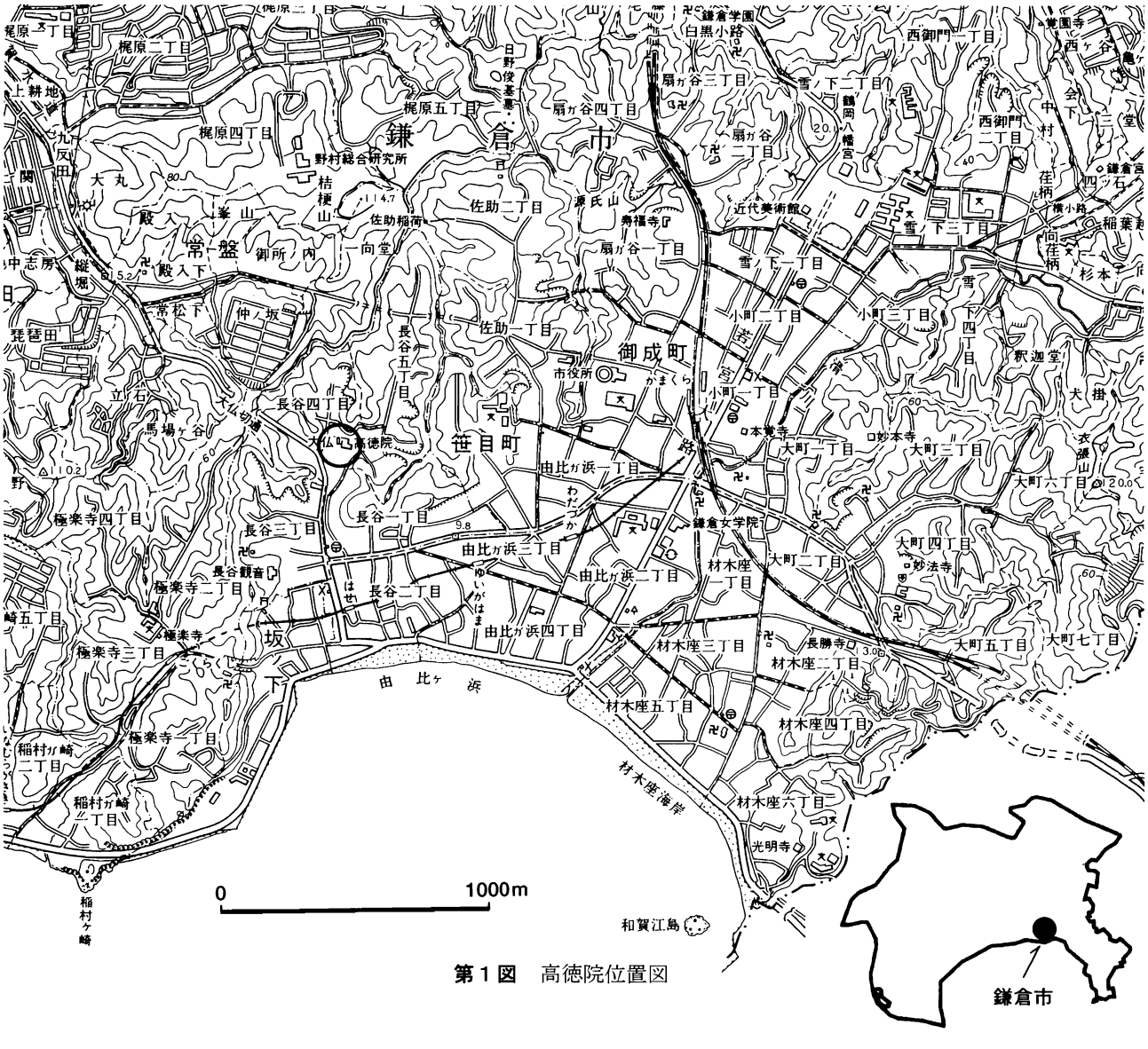
福田　誠

所 在 地　鎌倉市長谷４丁目550番１外
調査機関　鎌倉市教育委員会
調査担当　福田　誠
調査目的　鎌倉大仏周辺の遺構確認調査
調査期間　2000年８月21日～10月30日
調査面積　約230㎡

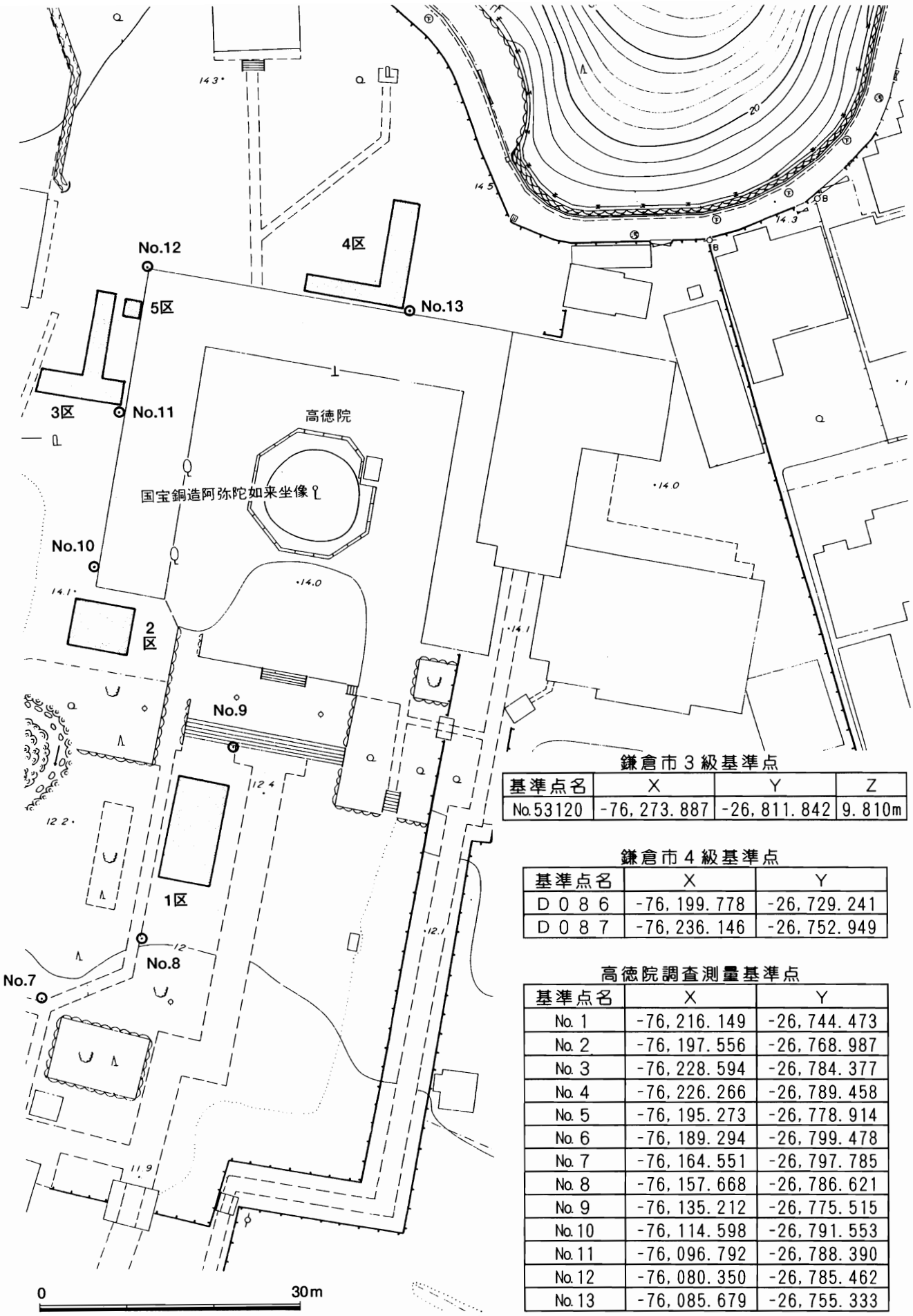
１．概要

現在、大異山高徳院清浄泉寺と号し、浄土宗の寺です。高徳院国宝銅造阿弥陀如来坐像（金銅製・像高11.39m）は、奈良東大寺の大仏に次ぐわが国第２の大仏です。奈良東大寺の大仏は、治承４年（1180）平重衡の焼討ちや永禄10年（1567）の兵火で消失しますが、改めて江戸前期に大仏殿と共に再建されています。高徳院大仏は、大仏殿こそ失われていますが鎌倉時代中期の造立当初のものです。国家的事業として進められた東大寺大仏の造立は正史で詳しく知ることができますが、鎌倉大仏に関する史料は乏しく勧進聖僧浄光をはじめ造立時の背景など不明な点が多くあります。

高徳院の東側には、北奥の谷戸中に端を発する稲瀬川が南の由比ヶ浜に向かい流れ下っていま



第１図　高徳院位置図



鎌倉市３級基準点

基準点名	X	Y	Z
No.53120	-76,273.887	-26,811.842	9.810m

鎌倉市４級基準点

基準点名	X	Y
D086	-76,199.778	-26,729.241
D087	-76,236.146	-26,752.949

高徳院調査測量基準点

基準点名	X	Y
No.1	-76,216.149	-26,744.473
No.2	-76,197.556	-26,768.987
No.3	-76,228.594	-26,784.377
No.4	-76,226.266	-26,789.458
No.5	-76,195.273	-26,778.914
No.6	-76,189.294	-26,799.478
No.7	-76,164.551	-26,797.785
No.8	-76,157.668	-26,786.621
No.9	-76,135.212	-26,775.515
No.10	-76,114.598	-26,791.553
No.11	-76,096.792	-26,788.390
No.12	-76,080.350	-26,785.462
No.13	-76,085.679	-26,755.333

第２図　調査区位置図

す。この稲瀬川が切り開いた大谷戸と呼ばれる開析谷の開口部と、西の小谷戸の開口部の合流地点、東西約150m、南北約200mの範囲が現在の高徳院境内です。大仏周囲の海抜は約14mで、およそ800m離れた由比ヶ浜に向かい緩やかな傾斜を形成しています。周囲の丘陵は海抜60m程で、三浦層群逗子層に属す泥岩層から構成されています。高徳院の西側には現在大仏隧道があり、常磐口を経て藤沢方面へ抜けられますが、この隧道が出来る以前、大仏から大仏切り通しを抜け常磐口に至る道筋はとても険しいものでした。

2．略年表

・『吾妻鏡』暦仁元年(1238)三月二十三日条

「今日、相模国深沢里大仏堂の事始也、僧浄光尊卑緇素に勧進せしめ、この造作を企てり」

：深沢里は現在の高徳院の位置にあたり、大仏堂を造営する儀式が行われ、僧浄光が浄財を勧進してこの企画を行ったとされています。

・『吾妻鏡』暦仁元年五月十八日条

「相模国深沢里大仏の御頭を挙げ奉る。周八丈也」

：この時に頭部を据え付けたこと、像の高さが約10mであることが判ります。

・『吾妻鏡』仁治二年(1241)三月二十七日条

「又深沢大仏殿に同じく上棟之儀あり」

：大仏殿を建てだしていることから、ほぼ大仏が完成していたと思われます。

・『吾妻鏡』仁治二年四月二十九日条

「囚人逐電の事、預人の罪科軽らず、過怠料を召し、新大仏殿の造営に寄進せらるべきの由」

：預かっていた囚人を逃がしてしまった罰として、新田政義と毛呂蓮光が大仏殿造営料として寄進を命じています。幕府が大仏造営に対して援助を与えていたことが判ります。

・『東関紀行』仁治三年(1242)秋

：大仏が完成し、工事が三分の二終わっていること、東大寺大仏と異なり木造であると記されています。

・『吾妻鏡』寛元元年(1243)六月十六日条

「深沢村に一宇の精舎を建立し、八丈余の阿弥陀像を安じ、今日供養を展ぶ。導師は郷僧正良信、讃衆十人、勧進聖人浄光房、この六年都鄙を勧進す。尊卑奉加せずということなし」

：この年に木造の大仏と大仏殿が完成し供養が行われたことが判ります。

・『吾妻鏡』建長四年(1252)八月十七日条

「今日彼岸第七日に当る。深沢里に金銅八丈の釈迦如来像を鋳始め奉る。」

：寛元元年（９年前）に阿弥陀如来像が完成している深　沢里で、同規模の釈迦如来像の鋳造が始まりました。この後、金銅八丈の大仏がいつ完成したかは不明です。(一説では1263年前後)

造立の記録だけみると、深沢里に大仏は木製と金銅製の二つあったことになります。当初木造であったものを後に金銅製に作り替えたとも、木造は金銅の原型だったなど諸説あります。暦仁元年五月十八日条で「大仏の御頭を挙げ奉る」と、鋳造では不可能なことで木造ならば可能なことです。原型と考えるならば大仏殿で周囲を覆ってしまった後に鋳造を始めることも考えにくく、木造大仏が大仏殿を含め何らかの理由（宝治元年九月一日　鎌倉大風、仏閣人家多く顛倒破損『吾妻鏡』）で破損もしくは倒壊し、改めて銅で造り直したものかもしれない。釈迦如来像とあるが、実際の大仏は阿弥陀如来です。

・『太平記』建武元年(1334)八月三日

「相模次郎時行（中略）大仏殿の棟梁、微塵に折れて倒れける間、其内にあつまり居たる軍兵共五百余人、一人も不残圧にうてて死にけり。」

：大仏殿が大風で倒れ、避難していた軍兵500余人全てが潰れ死んだとが記されています。

・『鎌倉大日記』応安二年(1369)九月三日

「大風により鎌倉大仏殿倒壊する。」

・『梅花無尽蔵』文明十八年(1486)十月二十四日

「禅僧万里集九、鎌倉大仏が露座であったことを記す。」

・『長帳続年代記』明応七年(1498)八月廿日

「由比ヶ浜の海水が大仏殿まで上がった。」

：明応年間以降、大仏殿の再建はなく露座として今日に至ったものと考えられています。

・『義演准后日記』慶長十五年（1610）四月十九日条

「未明、ユイノ浜、長谷寺、大仏等見学、大仏ハ如形也、鋳仏也、堂ハ無シ、七間方ノ礎残了、大石也」

：大仏殿について、堂は失われているが七間四方の礎石が残ることが記されています。

・『宝永元年訴状及び覚書』宝永元年九月七日

（1704）

「去年十一月廿二日夜大地震があり、大仏前方の台座の石壇が崩れ、大仏が三尺程下り傾き申候」

：地震によって台座が崩れ大仏が傾いたと記されています。またこの覚書の中に、境内に残る礎石の数が60個、大仏殿の規模、南北距離21間、東西距離25間と記されています。

・『大仏高徳院略記』正徳二年（1712）前後

：祐天上人により高徳院建立が行われ、台座の修理に始まり高徳院堂舎、銅灯籠が施工された。この時にまた、周辺の田畑を買い求め、境内の復興を進めています。

・『大仏尊再興記』享保十八年～（1734～）

：養国上人により大仏補修が行われ、大仏の破損した穴の鋳掛修理と蓮蓮座（３枚だけ）の完成を目指しました。

・『長谷村浄土宗高徳院大仏修造勧進帳』享保二十年正月（1735）

「南北二十一間東西二十五間、基石径方六尺」

：大仏殿の大きさと礎石の大きさに付いて記されています。

３．調査の成果

ａ．大仏造立時の土地の造作について

高徳院周囲の谷戸の地形は、三浦層群逗子層に属す泥岩層と大谷戸の開口部に堆積する堆積土から構成されています。岩盤の泥岩層は堅牢ですが谷戸内の堆積土部分は軟弱です。大仏造立時の土地の造成で、海抜11.0m前後で平坦面が造られたと考えられ、この時に高い岩盤・地山部分は削り出され、谷戸内の低い部分は埋め立てて造成が行われていました。各調査区の海抜11.0m前後で確認される岩盤面、地山面、そして大型の土丹塊を用いた地業層がこれにあたると考えられます。

ｂ．大仏に向かい高まる斜面堆積について

大仏の鋳造時には、周囲を土砂で埋め鋳型を固定しながら鋳込んでいったと推測され、大仏に残る横線がそれを物語っています。横線の数から体部だけでも７段に分けて鋳込まれていることが判ります。１段ごとに周囲を埋めてゆき、像高11.39m（現在は台座を含むと13.35m）の大仏が全て鋳込まれたときには完全に土砂の中に埋もれていたことになります。１段ごとに周囲を埋め込んでいった盛土が調査で確認された斜面堆積であると考えられます。炉を築き作業空間を考えるとかなり広範囲にわたり盛土が行われたものと推測され、大仏を中心とした円錐形の小山が築かれていったものと考えられます。盛土の中から鉱滓・溶けた銅片・鞴の羽口が出土することも、盛土を重ねてながら繰り返し鋳込み作業を行っていった証拠と考えられます。この後、鋳込まれた大仏を掘り出し、大仏殿を建てる平坦な地面に再び整地し直したと考えられます。この整えられた盛土に残された痕跡が、「大仏に向かい高まる斜面堆積」であり、この事から大仏は現在の位置で鋳込まれたことは確実なことだと考えます。

ｃ．根固め遺構について

今回３ヶ所検出確認された大仏殿礎石下の遺構は、礎石が動かされていても大仏殿の存在及び規模を確認する手がかりとなりました。根固めは、直径約３m、深さ約２mの規模の穴の中に土丹と砂利が交互に叩き締め詰め込まれていました。推測の域を出ませんが、重量122ﾄﾝ余りの大仏を支える基壇下も丹念に叩き締められている可能性が考えられます。

写真１　１区の斜め堆積

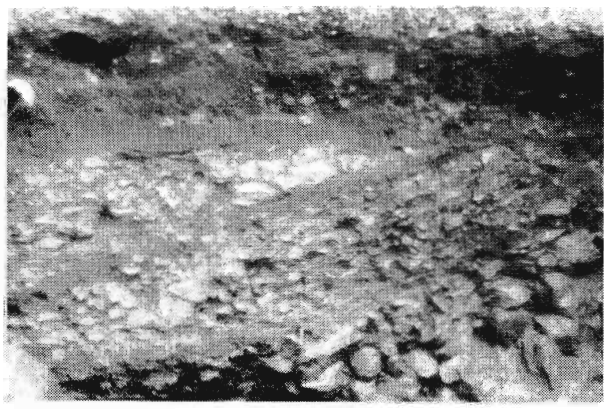
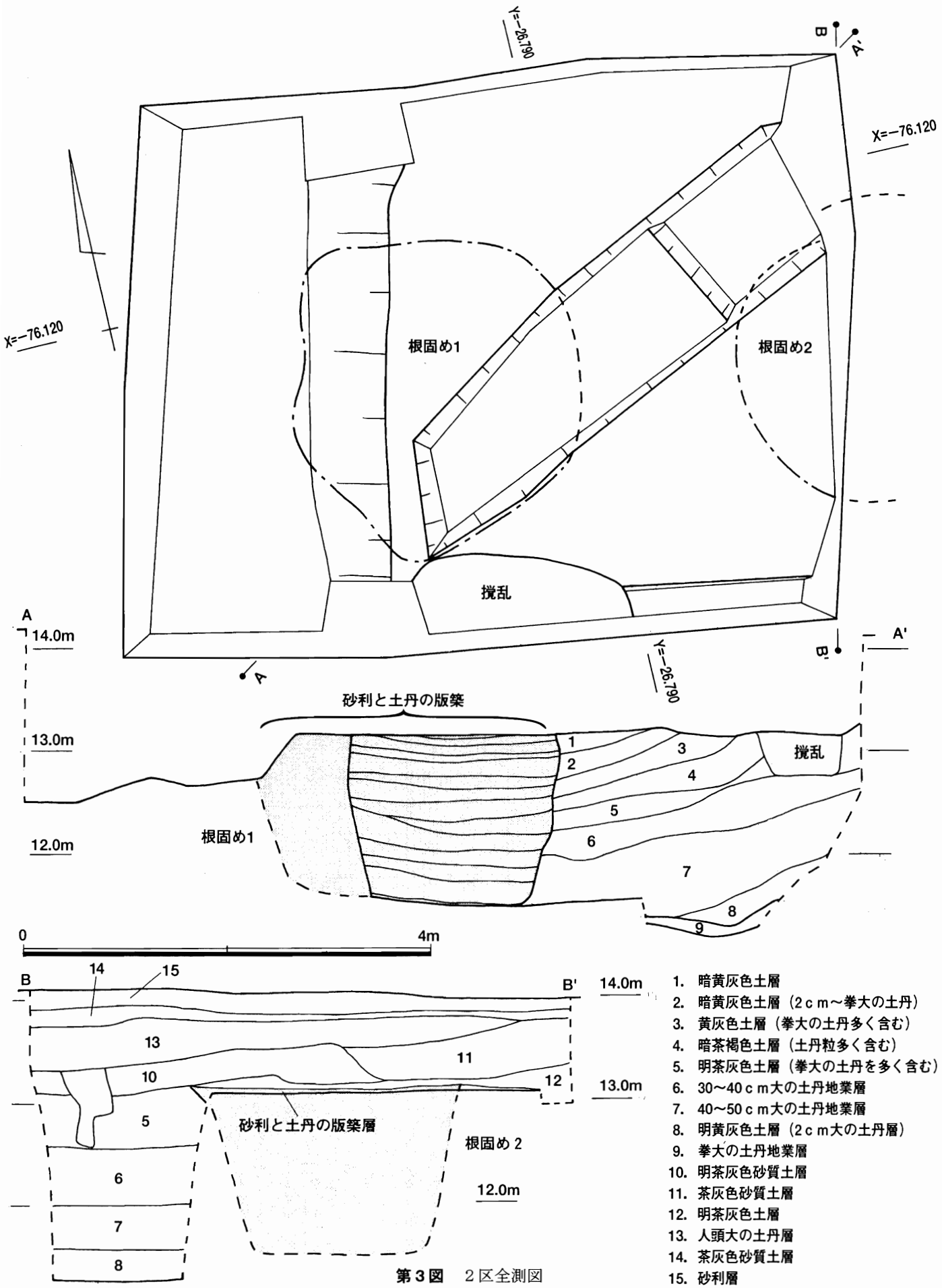


写真２　４区の斜め堆積



1. 暗黄灰色土層
2. 暗黄灰色土層（2ｃｍ～拳大の土丹）
3. 黄灰色土層（拳大の土丹多く含む）
4. 暗茶褐色土層（土丹粒多く含む）
5. 明茶灰色土層（拳大の土丹を多く含む）
6. 30～40ｃｍ大の土丹地業層
7. 40～50ｃｍ大の土丹地業層
8. 明黄灰色土層（2ｃｍ大の土丹層）
9. 拳大の土丹地業層
10. 明茶灰色砂質土層
11. 茶灰色砂質土層
12. 明茶灰色土層
13. 人頭大の土丹層
14. 茶灰色砂質土層
15. 砂利層

第３図　２区全測図

d．大仏殿について

根固めの礎石位置は、大仏正面中軸から左に約22m、大仏側面軸線から前に約19mになります。この礎石位置が大仏殿の南西角に当たるならば、正面中軸で東に折り返すと大仏殿正面の幅は約44mになります。西北の根固めの礎石位置は大仏殿の南西角と考える根固めから約38m、これは大仏側面軸線から南西角の根固めまでの距離の倍の数値です。これにより大仏殿は正面約44m、側面約38mの規模であることが確認されました。

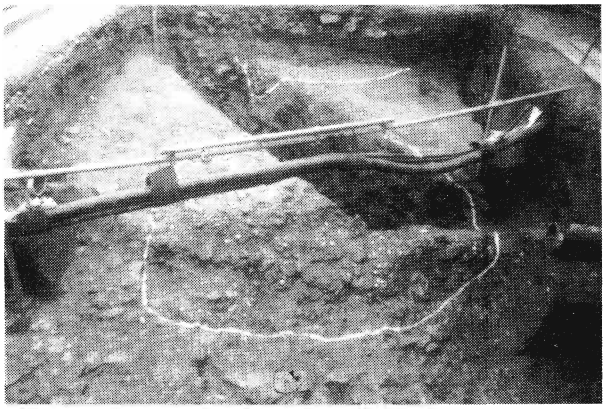


写真３　２区の根固め遺構①

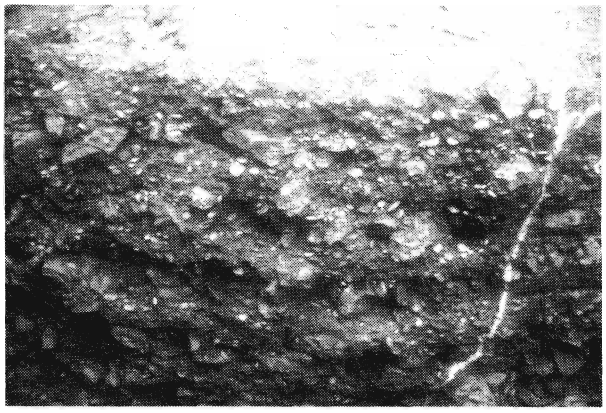
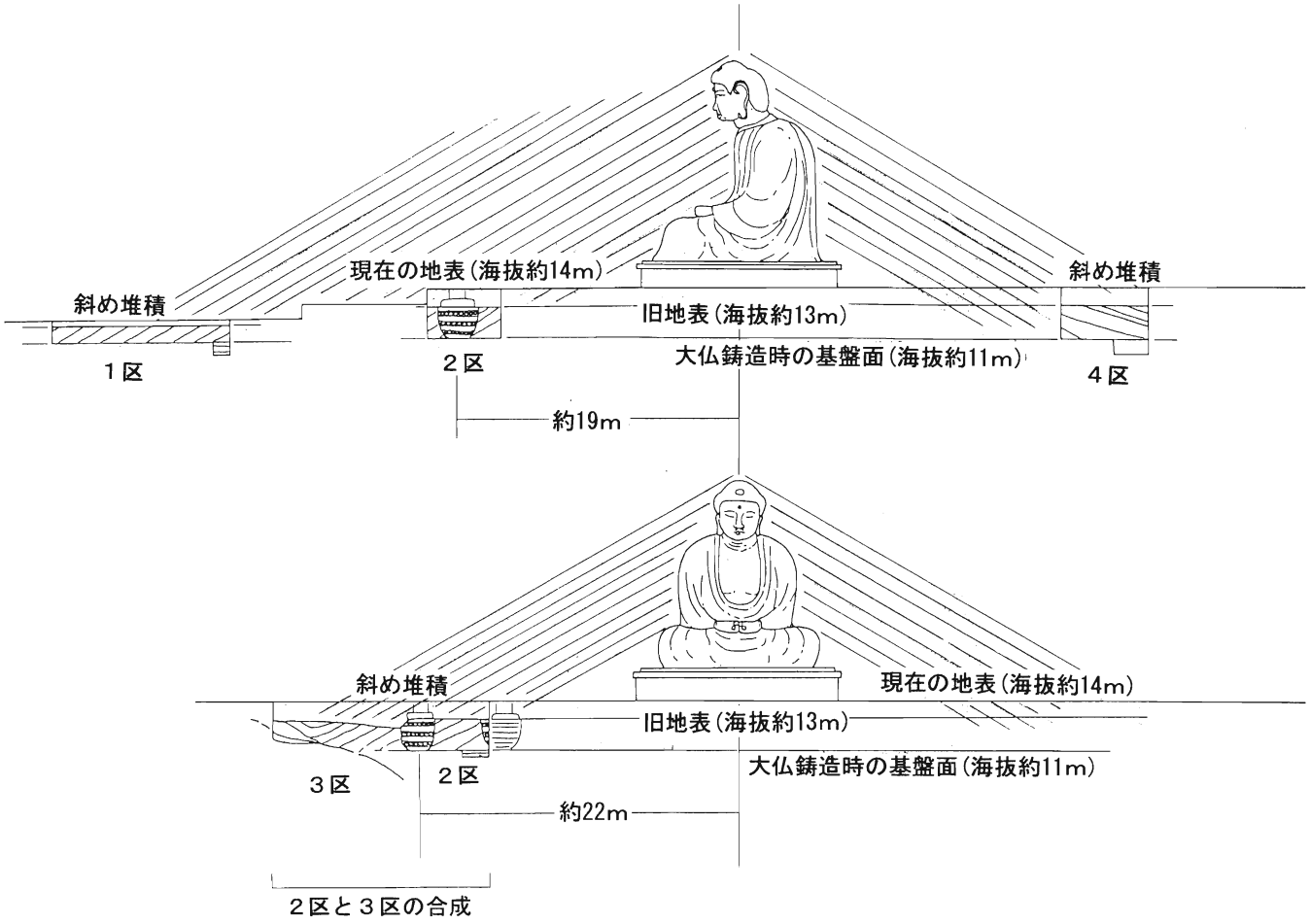


写真４　２区の根固め遺構②



横須賀市 向井将監正方夫妻の墓

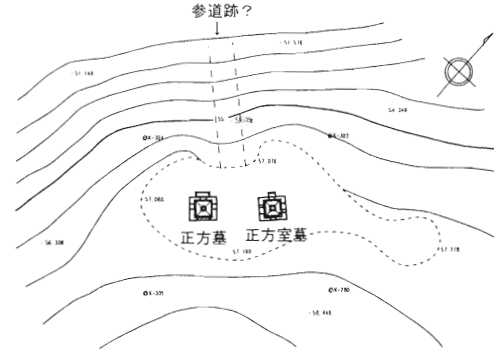
中三川　昇

所 在 地　横須賀市池田町１丁目79－１
調査機関　横須賀市教育委員会
調査担当　中三川　昇
調査目的　宅地造成工事による墓地移転
調査期間　2001年１月18日～２月２日
調査面積　約150㎡

１．向井将監正方夫妻について

向井将監正方は元和七(1621)年に江戸幕府御召船奉行、向井将監忠勝(知行六千余石、墓は上野の東叡山寛永寺本覺院)の五男として生まれた。父忠勝は大阪夏・冬の陣では士卒数百名を率いて活躍し、後に江戸湾防備の要である三崎・走水の海関御番も勤め、将軍家光らの命により当時日本最大の船であった「安宅丸」(全長約61ｍ、推定満排水量1700ｔ）を造り、御召船奉行として同船を預かるなど、幕府水軍のトップとして数多くの事跡を残している。正方は父の死後、遺領一千石(三浦郡大津・森崎村等)を分与された、後に本家断絶のため将監名と御召船奉行の職務を踏襲する。走水奉行も勤め、安宅丸の修理を行い、将軍家綱の御船遊覧（現代の観艦式）では船手衆の指揮官を勤めた。後に一千石(三浦郡小矢部・金谷・池上・不入斗村等)が加増され、知行二千石の旗本として水主100名と安宅丸・天地丸・竜王丸などを預かるが、延宝二(1674)年大津村にて病没。享年54歳。法名は大通院義山浄節居士。妻は服部玄番頭冬次の娘で寛文十(1670)年41歳で病没。法名は霊徳院心鑑自照大姉。先に正方は母の菩提を弔うため大津村所在の吸江庵を再興し竹林山貞昌寺とし、正方夫妻も同寺の廟所に埋葬された。なお、正方以後の向井家代々の墓は江戸深川の陽岳寺にある。

第１図　遺跡位置図〔1:25,000〕

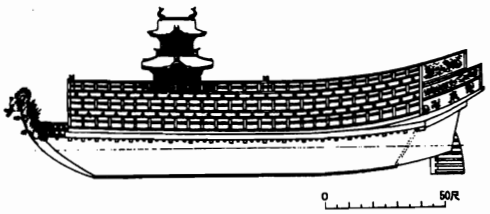


第２図　向井将監夫妻墓所平面図〔1:400〕

２．遺跡の立地

本遺跡は三浦半島の東岸中部の東京湾に面した丘陵頂部付近の北西向き斜面を削平した面積約150㎡ほどのテラス(標高約57ｍ)に立地する。正方は自身の江戸屋敷があった江戸方面と祖父向井兵庫頭正綱（徳川家康の船手頭として小牧・長久手の合戦や小田原の役で活躍し、知行二千石の旗本

となり御船奉行を勤める。知行地は三浦郡が中心で、三浦市桃見寺に墓が現存）が過去に武田家に仕えた駿河方面の象徴として富士山を望める場所を墓所に選んだと伝わるとおり、各墓碑とも北西方向を向き、墓所からは東京湾の奥部から富士山までが遠望できる。また、近接地に貞昌寺やその別院があり、墓所北西の低地には向井将監家の屋敷があったとされる。なお、この場所は幕末期に執筆された三浦半島の地誌である『三浦古尋録』の写本の一つでは「廟所山」とされ、近隣に正方の屋敷があったと記されている。



第３図　安宅丸想定復元図(石井1995より一部改変して掲載)

３．調査経緯

向井将監正方夫妻墓は正方が中興開基した貞昌寺により維持・管理されていたが、この墓地を含む地域で宅地造成事業が計画され墓地の移転が必要となった。正方夫妻墓は市内では数少ない江戸幕府旗本墓であったので、移転に際しては立ち合い調査を含め適時必要な調査を行なうことなった。2000（平成12)年９月に墓碑が解体されたが、地下の墓坑等の存在は確認できなかった。この時点では実質的な供養塔かと思われたが、2001(平成13)年1月16日に至り正方夫妻墓の墓坑と甕棺が工事関係者により発見された。連絡を受け本市教育委員会が現地を確認した時点では既に正方墓甕棺内の遺髪・副葬品などの大半が回収されていたが、正方室墓（正方夫人の墓を以後正方室墓とする）の甕棺は未開封で資料的価値が高いと判断されたため、正方墓の残存部分を含め発掘調査を行なうこととなった。

４．調査概要

（１）向井将監正方墓

埋葬時期は延宝2(1674)年７月10日以降。

墓　碑形式は二重基壇の笠塔婆型、安山岩製、総高372.5cm(地表下部を含む)・下層基壇前面幅215.8cm、塔身右側面・塔身前面花頭框内・塔身左側面・笠天井内面に銘文。塔身及び笠天井内面の銘文には向井将監銘と寛文十年の没年銘あり。

墓の型式は木炭床木槨甕棺墓。墓坑は平面形が方形・断面形ともほぼ方形を呈し、規模は底面で1.25m×1.35m以上を測る。墓碑底面から墓坑底面までの深さは1.787mを測り、墓碑底面から甕棺蓋までの深さは約0.9mを測る。墓坑埋土の大半が除去されていたが、墓坑底面全体に木炭と籾殻が互層に敷詰められ、甕棺の周囲からは多量の鉄釘と鉄製吊り金具4点などが出土した。

出土遺物は備前大甕１(口径約73cm、器高約89cm)、刀２(刀装具類残欠あり)、扇子１、煙管１、曲物断片、布(絹か)類断片・数珠玉(植物種子製か)・鉄製鎹・釘類など多数、木槨吊り金具４、銅線２、墨書銘(未解読)付き銅板張り木製蓋１、遺髪・遺骨(骨片若干)・遺歯、木炭・籾殻など。

（２）正方室墓

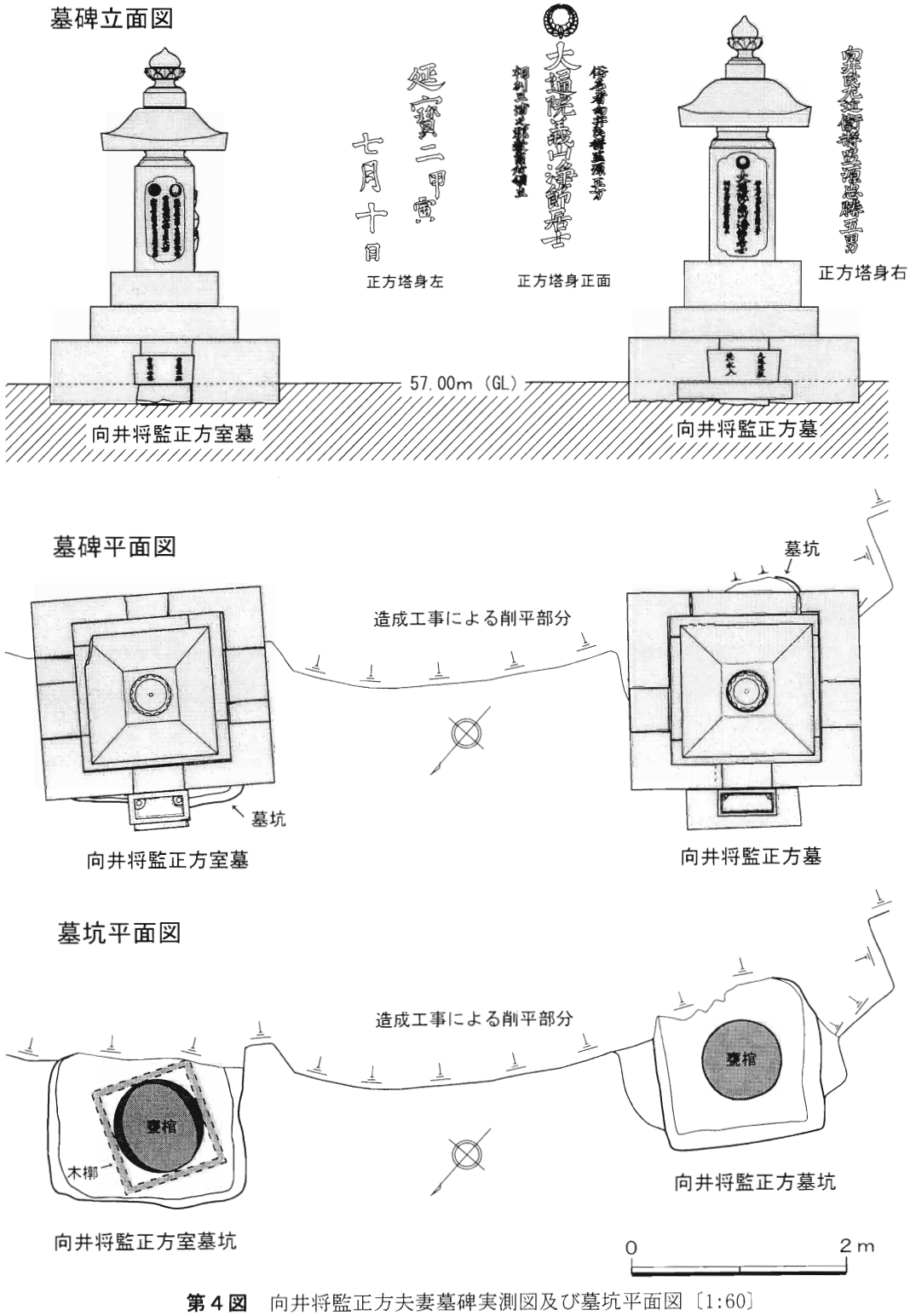
埋葬時期は寛文10(1670)年９月14日以降。

墓碑形式は二重基壇の笠塔婆型、安山岩製、総高332.5cm(地表下部を含む)・下層基壇前面幅212.6cm、塔身前面花頭框内・塔身左側面・笠天井内面に銘文、塔身右側面に仏像。

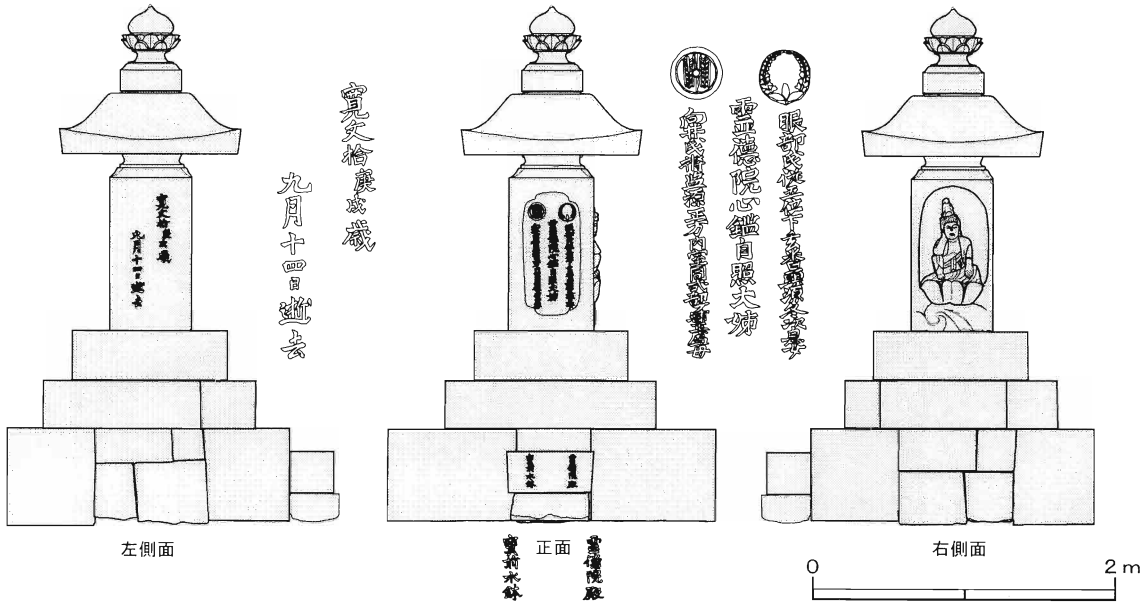
墓の型式は木炭床・槨木槨(籾殻充填)甕棺墓。墓坑は平面形が方形・断面形ともほぼ方形を呈し、規模は底面で1.6m×1.3m以上を測る。墓碑底面から墓坑底面までの深さは2.32mを測り、墓碑底面から甕棺蓋までの深さは1.34m前後と想定される。甕棺は僅かに南西方向に傾き下部が潰れた形で遺存していた。外面の甕棺と蓋との接合部には漆喰が帯状に巻かれ、木槨の木質との間には

白く脱色した籾殻が充填されていた。また木槨の外側は上面を含め木炭に覆われていた。木槨自体は僅かに木質が遺存するのみであったが、内側の籾殻層外面にその輪郭を留め、多量の鉄釘が原位置から近接した位置で出土しており、墓坑の形状は方形で95×90×95cmほどの規模と推定された。なお、墓坑底は厚さ10cm前後の木炭床である。

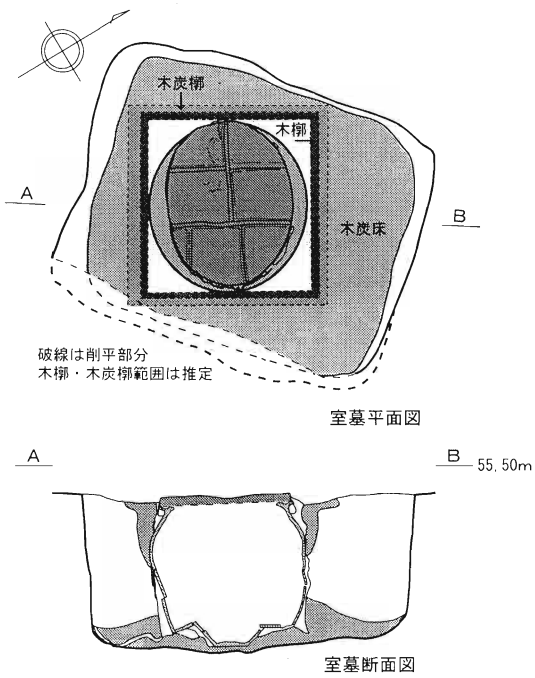
甕棺内の遺存状況は比較的良好であった。遺骨の残りが悪かったが大腿骨や上腕骨・肋骨・脊椎骨・頭蓋骨などの一部と歯・毛髪などが遺存していた。また副葬品の大半は遺体の腹部から足元にまでの位置で出土した。出土遺物は常滑大甕１（ロ



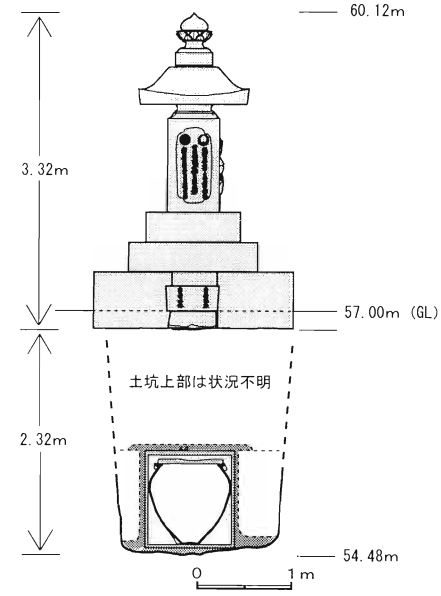
第４図　向井将監正方夫妻墓碑実測図及び墓坑平面図〔1:60〕



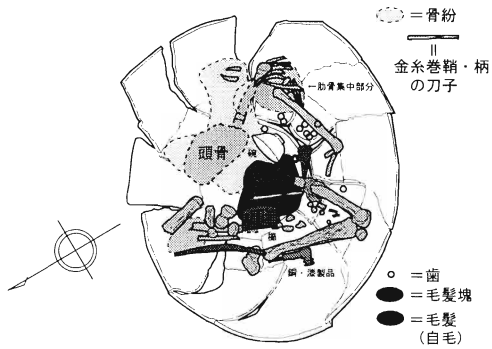
第５図　向井将監正方室墓碑実測図〔1:50〕



第６図　向井将監正方室墓実測図及び想定復元図〔1:40〕



第７図　向井将監正方室墓の甕棺と墓碑との垂直位置〔1:80〕



第８図　向井将監正方室墓甕管内遺骨・遺物出土状況〔1:20〕

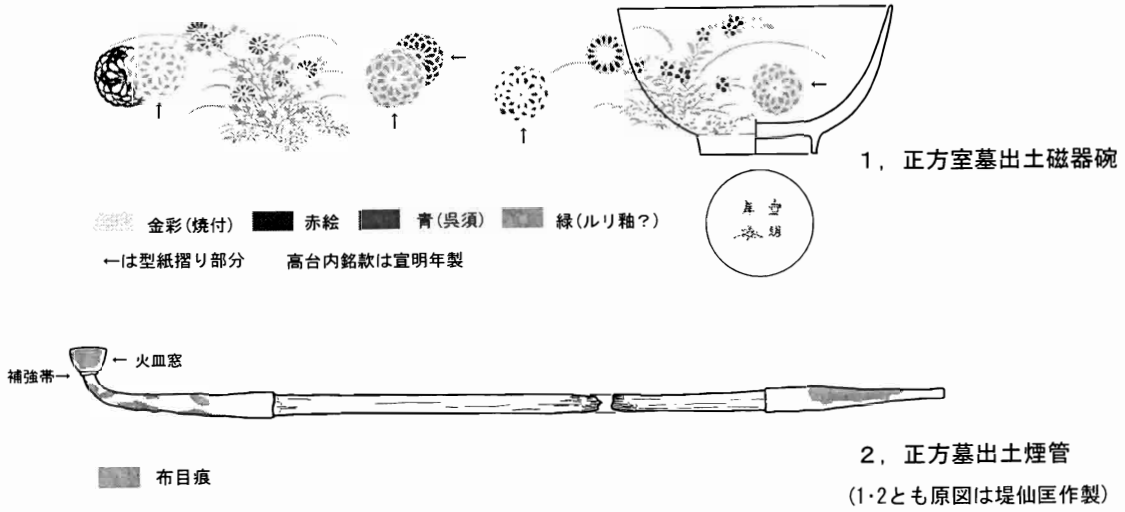
縁部断面Ｙ字形、口径60cm弱、器高約85cm)、肥前系磁器色絵茶碗１(金彩、花弁に型紙摺り技法、口径10.8cm、器高5.8cm)、漆器椀１(外面に松竹鶴亀文)、木製櫛２、刀子１(金糸巻柄・鞘)、性格不明銅漆製品１、寛永通宝７(甕棺内出土の古寛永２・文銭２・不明２、棺外出土古寛永１)、数珠玉(水晶製と植物種子製)・鉄製鎹・釘類・木槨残欠など多数、墨書銘(寛文10年銘)付き銅板張り木製蓋、遺髪・遺骨・遺歯、木炭・籾殻など。

５．まとめ

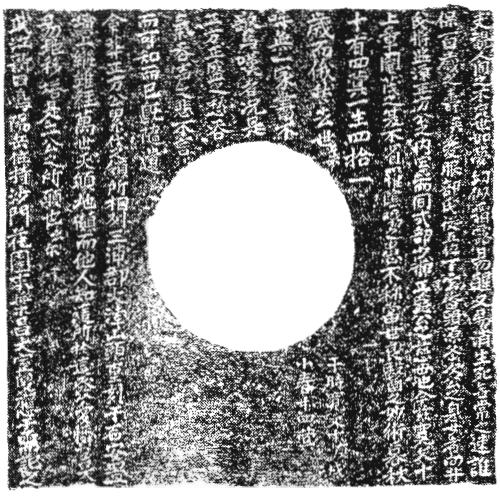
向井将監正方夫妻墓は寛文・延宝前後の旗本墓としては埋葬人物と没年などが特定できる稀有な調査事例である。各遺骸は死後あまり時を経ず棺内に納められたと想定され、遅くとも数ヶ月以内には墓坑内に埋納されたと考えられる。つまり正方室墓甕棺と棺内出土遺物については寛文十(1670)年代以前に、正方のそれらは延宝ニ(1674)年以前には生産・流通した物品であったと言えよう。この年代は木槨甕棺墓の出現期に相当すると考えられていたが、良好な事例は皆無に近く、恐らく確実な事例としては今回が初めての調査事例となろう。埋葬形態における新事例としては墨書銘の記された銅板貼の蓋、正方墓の甕棺内日本刀副葬、正方室墓の木槨内籾殻充填などがあげられ、正方墓における備前大甕使用は僅少事例である。出土遺物では若干の性格不明品を除き新事例は無い前系色絵茶碗、漆器碗などはいずれも元禄期以降が、正方墓出土の煙管、正方室墓の常滑大甕、肥あるいは18世紀代の年代観が与えられるか、盛興するとされているものである。これらにより木槨甕棺墓や各遺物の年代観がどのように変動するかは今後の課題であるが、今回の調査事例が近世考古学における一つの定点・規準資料となることは確実かと思われる。

最後に今回の調査は正方夫妻墓の一部分を調査したのみで、調査者自身、江戸期の墓制についての予備知識が皆無に近い状態で行なったものであり、事前協議の在り方を含め調査方法自体についても反省すべき点が多々あると認識している。また、300年以上前の墓とは言え被葬者が判明し、かつ末裔の方もご存命のいわば「現役のお墓」でもあり、無主物としてのいわゆる埋蔵文化財として行政的に取り扱うことは躊躇された。しかしながら関係各位のご理解・ご協力のもと調査が行なわれ、多くの新事実を明らかにすることができた。この調査結果を報告書作製により広く公開し、貴重な遺品類を保存・活用していくことが故向井将監正方夫妻へのなによりの供養となろう。なお本稿を記すにあたっては堤仙匡氏の協力を得た。末尾ながら記して感謝の意を表したい。

文献＝石井謙治1995『和船Ⅱ』法政大学出版局



第９図　出土遺物実測図〔1:3〕



第10図　向井将監正方室墓碑笠裏銘文〔1:20〕

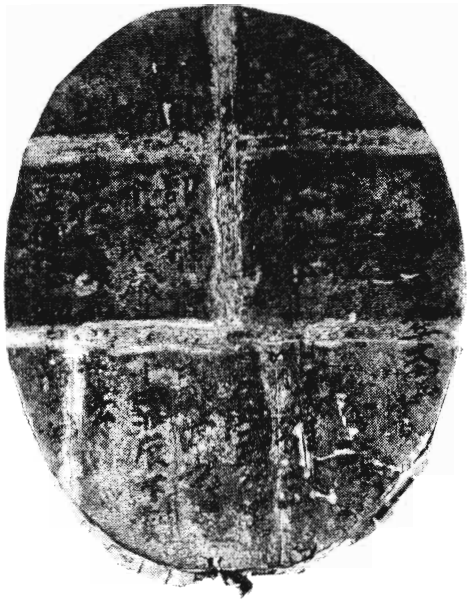


写真1　向井将監正方室墓蓋銘文

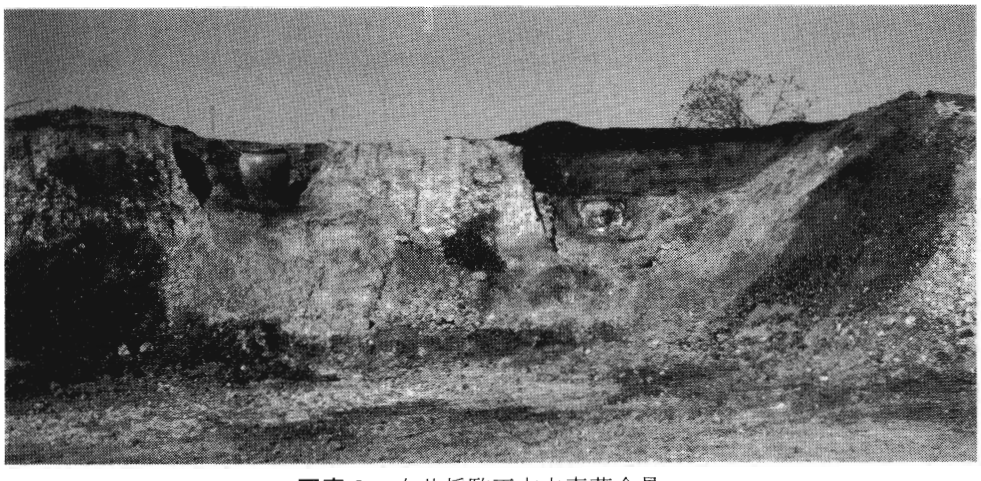


写真2　向井将監正方夫妻墓全景

写真3　向井将監正方室墓甕棺と木槨遺存状況

平塚市 構之内（かまえのうち）遺跡 第４地点

― 古代の道路状遺構 ―

大野　悟

所 在 地　平塚市中原上宿173番地先市道
調査機関　平塚市教育委員会
調査担当　大野　悟
調査目的　公共下水道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
調査期間　1999年11月25日～2000年2月2日
調査面積　180㎡

１．遺跡の立地

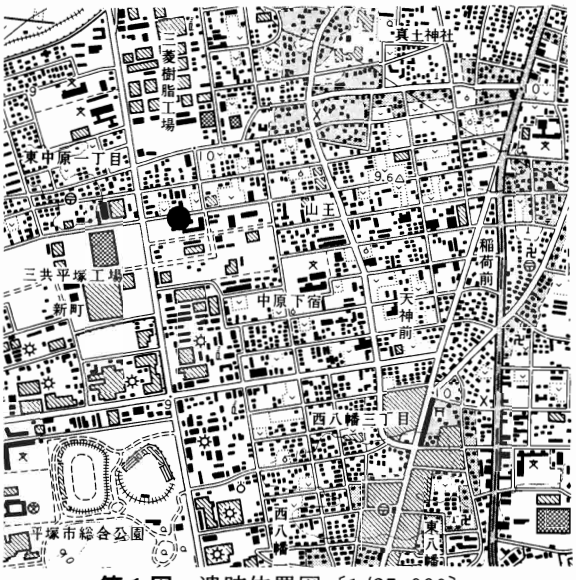
構之内遺跡は市域平野部の中央南部の砂州・砂丘列地帯に在る遺跡である。砂州・砂丘地帯は海岸線と平行に東西方向に延びる十数列の砂州・砂丘列の微高地とこれに挟まれる砂丘間凹地から構成される（森1993）が、平塚市横内付近の最北列から数えて第３列目の砂州・砂丘列上に本遺跡第４地点が位置する。（第１図）

第３列及び凹地を挟んだその南の第４列上には市域でも最も多くの奈良･平安時代を主体とした遺跡が帯状に分布しており、特に本遺跡を含むその東半分では「国厨」墨書土器や大量の緑釉・灰釉陶器、鍛冶工房遺構や大型掘立柱建物などの高密度の遺構・遺物が検出されていて、古代相模国府推定域（明石1995）として注目されている。（第２図）

２．調査経緯

本調査は中原上宿（現：四之宮一丁目）173番地先の東西方向の市道における雨水用下水道：中原上宿枝線（雨水）築造工事その７に伴う調査である。このため調査範囲は市道沿いの開口部幅2m、延長90mの細長いトレンチ状である。

道路使用許可条件により20m～30mずつ4箇所に分割し、東側から順にそれぞれ発掘調査と工事を行い、道路復旧した後に次の箇所に移った。従って実際に調査に要した日数は調査期間に比して短く、21日間である。４箇所の調査範囲は東から第１～第４トレンチと名付けた。各トレンチの調査範囲は連続している。



第１図　遺跡位置図〔1/25,000〕

３．調査概要

本調査の最も大きな成果は、平成６年に実施された本地点の南東側に隣接する構之内遺跡第３地点で検出された両側に溝を伴う古代道路遺構（上原1995・大野他2000）の続きが検出され、さらに北西方向に延びることが確認されたことである。（第４図）

狭小かつ小面積の調査ながら、この道路状遺構のほか、９・10世紀代の竪穴住居址10軒、井戸址1基、溝状遺構（道路に伴うものを除く）５条、ピット79基と中・近世の溝状遺構４条他が検出されている。又、遺物も同時期の土師器・須恵器・灰釉陶器等整理箱10箱分が出土した。

４．道路状遺構について

まず、本地点における道路状遺構の規模と形態について述べる。第３～第４トレンチにかけて検出された道路は東西に長い調査範囲に対

し、斜めに交わって検出された。既述のとおり両側に溝を伴っており、４号溝（ＳＤ０４）が北東、８号溝（ＳＤ０８）が南西側に位置する。（第３図）両溝中心間は推定で約12mを測る。道路面（硬化面）は層厚約５～７cmあり、非常に硬質である。層中に土器片等の遺物はほとんど含まれていない。道路面の標高は8.1m前後で第３地点の道路面より20cmほど低いが、両地点間は約120m離れており、ほぼ連続した平面と捉えてよいと考えている。

時期としては、本地点では明確に遺構に伴う遺物が少ないが、９世紀～10世紀前半代の竪穴住居址等の遺構と重複せず、且つ、これら遺構の軸方向が道路状遺構とほぼ平行することや、覆土が類似する点から、少なくともこの時期に並存したと考えられる。４号溝からは15歳以上と推定される老齢馬の上顎歯列が出土しているが、四之宮地区等の国府推定域（明石1995前掲）周辺で検出される同時期の溝状遺構に類例が多い。（大野1984）

一方、第３地点では溝出土遺物の年代観から８世紀後半代には機能していたと考えられ1)、９世紀代以降では北側の溝は埋まり、やや南寄りに振っていたと思われる。又、２地点とも硬化面が中世遺構に切られる。（大野2000・上原2001）

次にこれら２地点以外の遺跡における同一と推定される道路状遺構について述べる。まず、構之内遺跡第３地点に先行して実施され、わずか５m東に隣接する同遺跡第１地点Ａ地区では北側の溝及び硬化面の一部が検出され、この南に隣接する同地点Ｂ地区では検出されなかったことから、この間で屈曲してほぼ東方向に走行することが判明した。（第４図）（河合英夫ほか1994・上原1999）その東方の1991年度調査の山王Ｂ遺跡第４地点２）では砂州・砂丘域と砂丘間凹地の境界に沿うように延び（大野2001）、さらにその東では山王Ａ遺跡第２地点３）でも確認された。（上原ほか1993）規模については、２地点ともに両側の溝を含めて幅約11mである。規模や形態、それぞれの延長方向を考慮すればこれらはすべて同一の道路状遺構として矛盾しないと考えられる。道路状遺構の延長は現在報告されている遺跡では、この山王Ａ遺跡第２地点から本地点までで約700m（上原2001）、筆者が実見した、山王Ａ遺跡東端の試掘調査地点4)を含めると総延長は900mに達し、そして国府推定域を東西に貫く方向に延びている。

古代律令期において、このような大規模道路の位置付けは、本遺構が他の建物遺構等の在り方を規定している点からみても官道（公道）と考えられる。国府推定域との位置関係からして現時点では古代の東海道と考えている。今後、さらに東方の四之宮地区高林寺遺跡・坪ノ内遺跡から相模川河岸に至る地域における本遺構の検出によって、未発見の国府政庁域の解明も進展するものと期待される。

５．まとめ

構之内遺跡第４地点で検出された道路状遺構は同遺跡第３地点で初めて確認された道路の北西方向の延長である。さらに過去に行われた東方延長線上の各調査地点成果においても再検討の結果、道路状遺構が確認された。規模・形態及び延長方向からこれらは一体の遺構と考えられ、その在り方・規模から古代の官道、東海道と考えられる。

註

1) 大野2000では、遺物の年代観を四之宮下郷編年（小島1984）から８世紀前半としたが、宮久保編年や湖西編年の年代観から８世紀後半代に修正する。

2) 調査時は道路として認識せず、立地条件と遺構の在り方から「住居域（砂州・砂丘）と水利域（砂丘間凹地）を区画する２条の平行する東西溝に挟まれた遺構の空白部分」としていた。後世の撹乱により硬化面部分の残存がよくなかった点も一因であった。

3) 2)と同様に構之内遺跡第３地点調査以前では道路としては認識していなかったが、調査成果を再検討し、土層断面の観察記録等から道路状遺構とした。

4) 2000年度に平塚市教育委員会で実施したもの。栗山雄揮氏が担当し、両側に溝を伴い、硬化面の層厚は5cm以上を確認した。その後、本調査が実施されたがこれについては未報告。

引用・参考文献

大野悟　1984「動物遺存体」『四之宮下郷』神田・大野遺跡発掘調査団

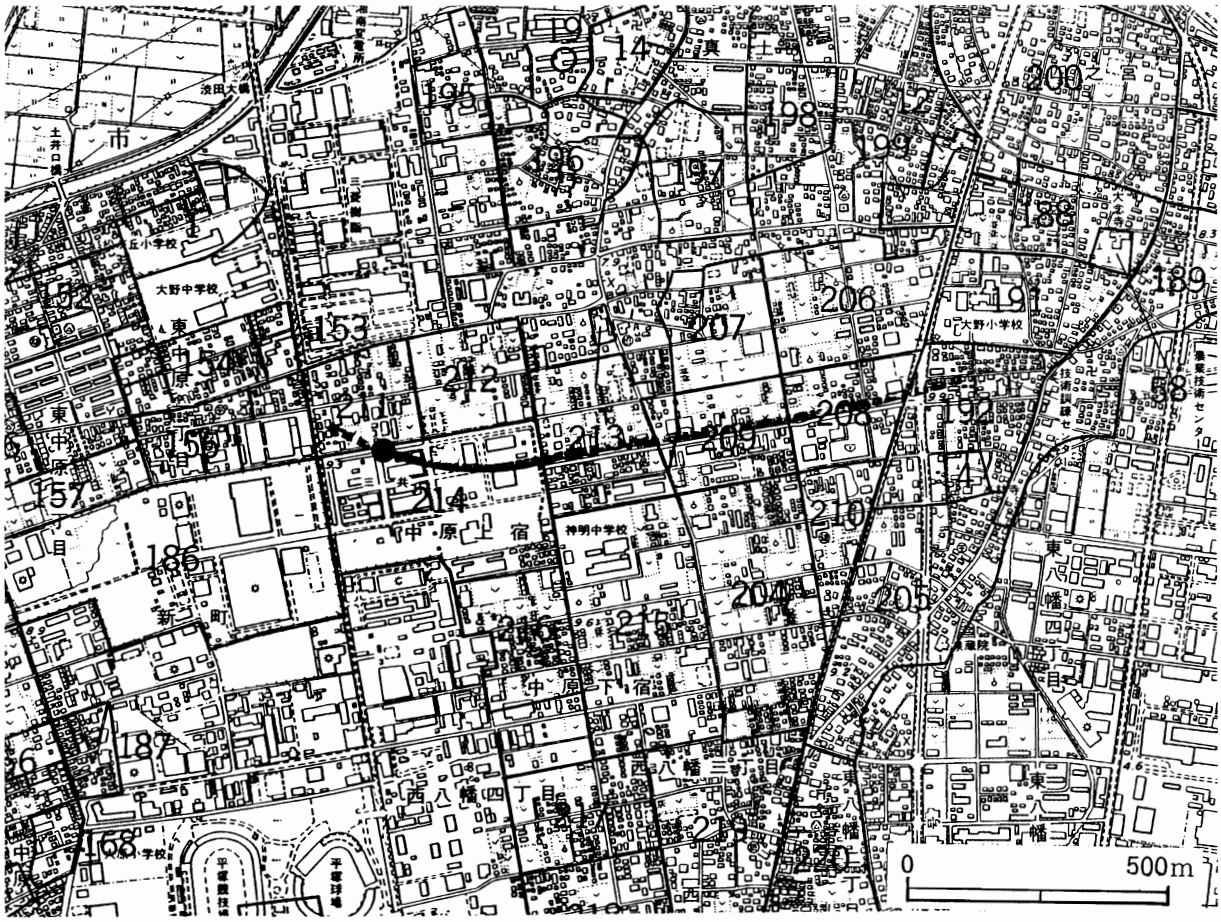
森慎一　1993「平塚市における相模沖積平野の微地形」『自然と文化16号』平塚市博物館

上原正人ほか　1993『山王Ａ遺跡第二・三地点』平塚市教育委員会　平塚市埋蔵文化財調査報告書第10集

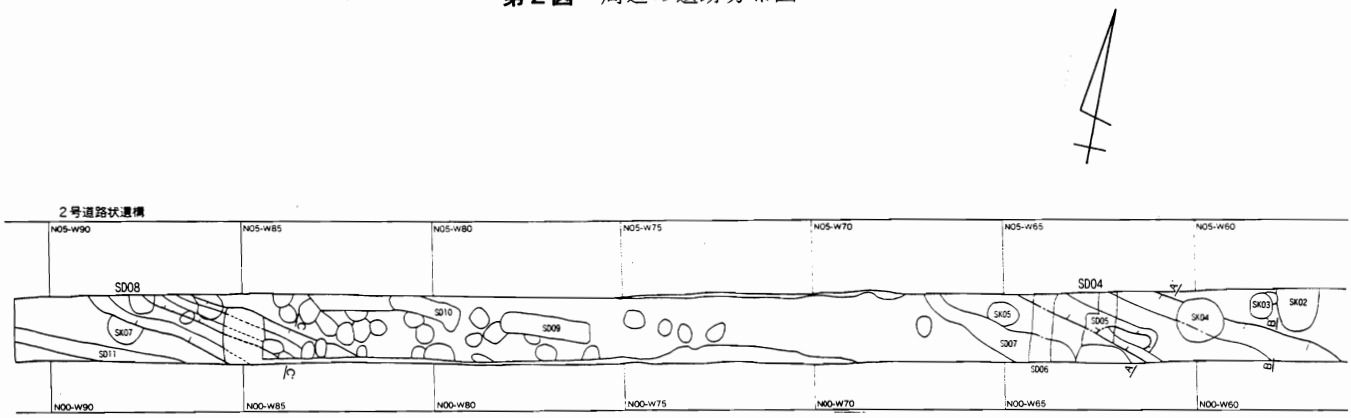
河合英夫・田村良照ほか　1994『構之内遺跡発掘調査報告書』三共株式会社・構之内遺跡発掘調査団

日野一郎・上原正人　1995「平塚市構之内遺跡」『第19回神奈川県遺跡調査研究発表会発表要旨』神奈川県考古学会

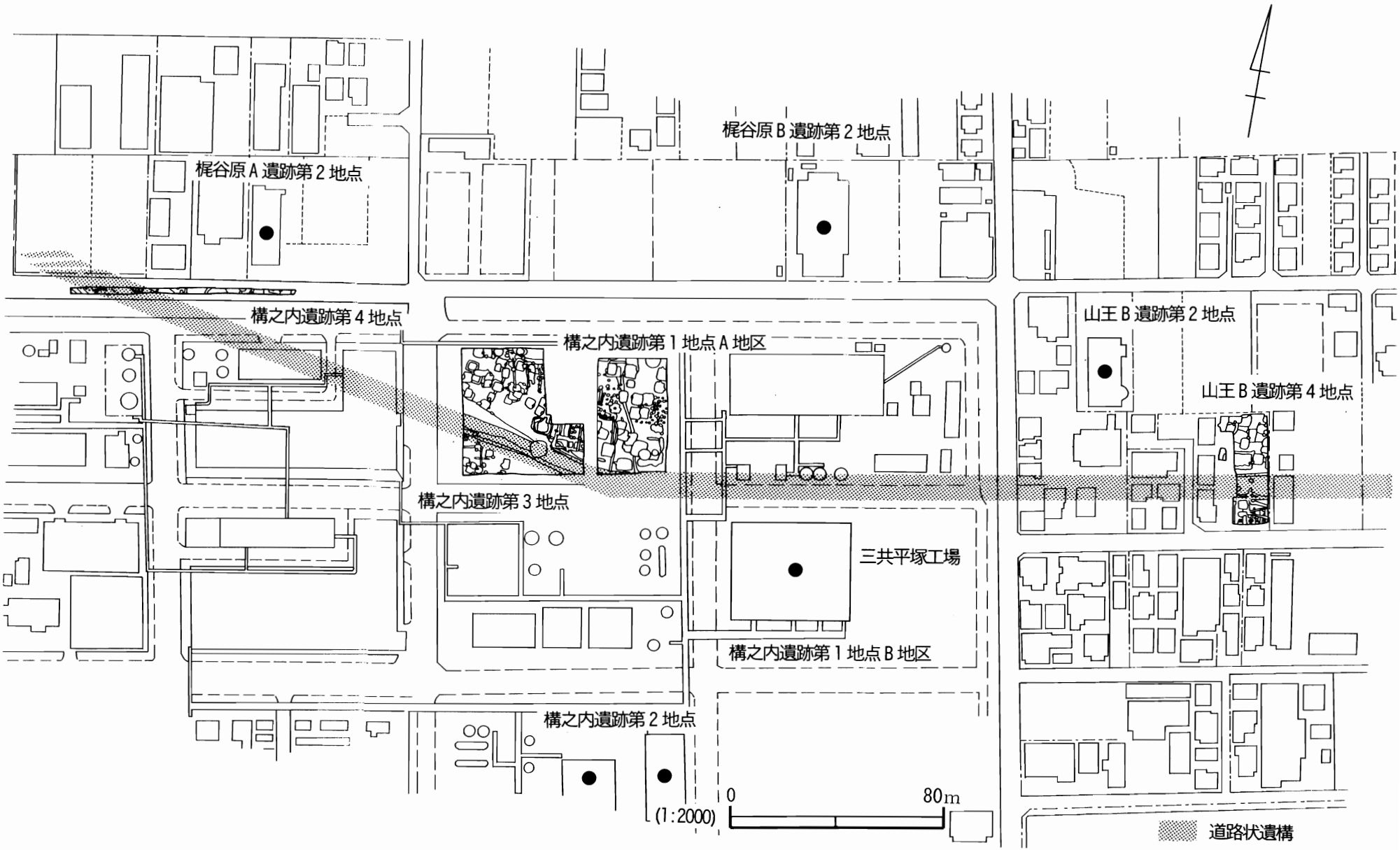
明石新　1995「相模国府域の様相」『考古論叢神奈河第4集』神奈川県考古学会



第２図　周辺の遺跡分布図



第３図　道路状遺構全体図



第4図　周辺遺跡における道路状遺構検出状況

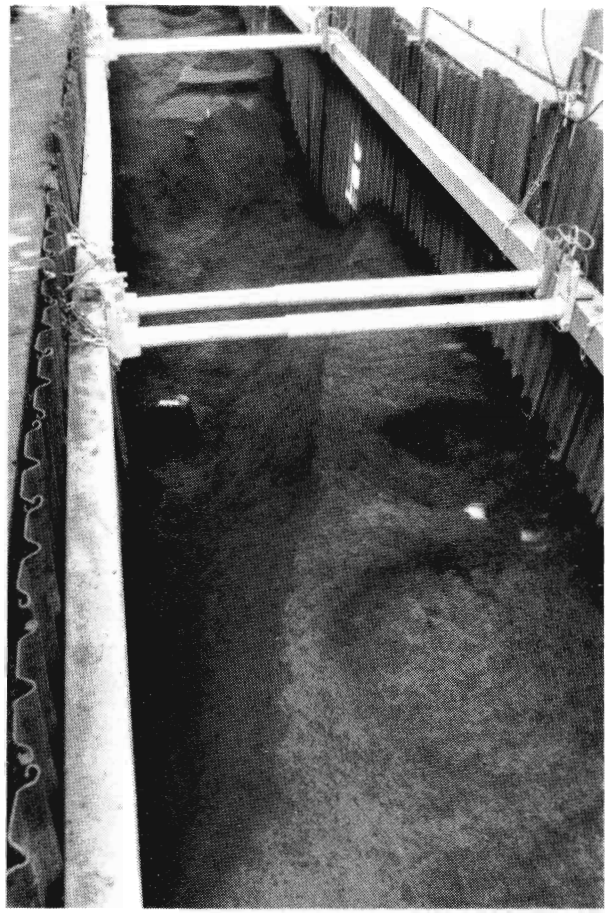


写真１　道路北東側の溝(ＳＤ０４)

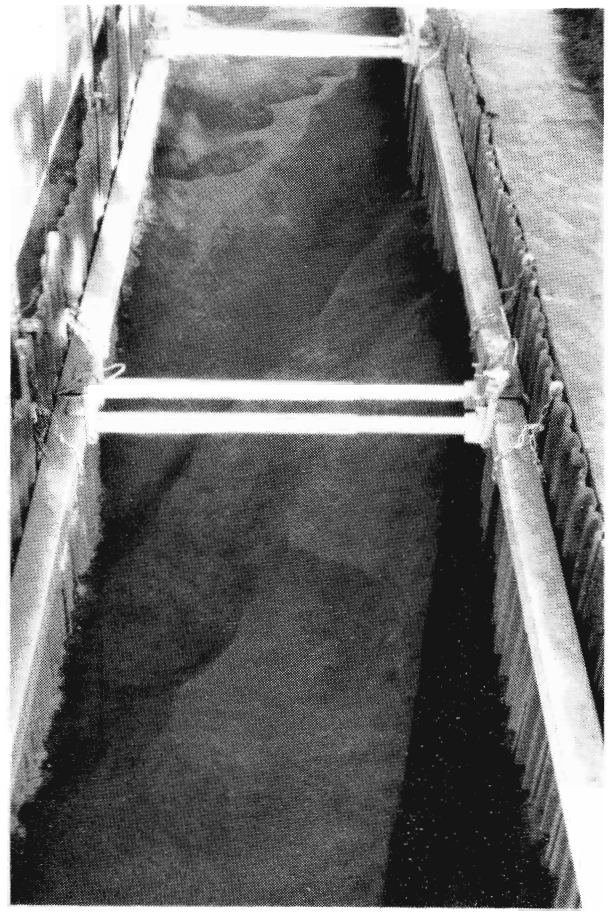


写真２　道路南西側の溝(ＳＤ０８)

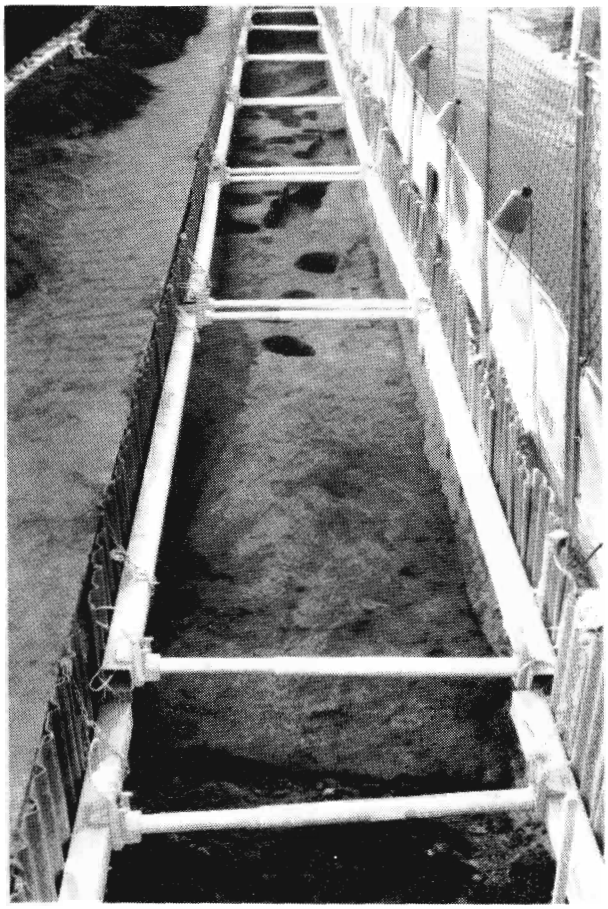


写真３　道路硬化面部分

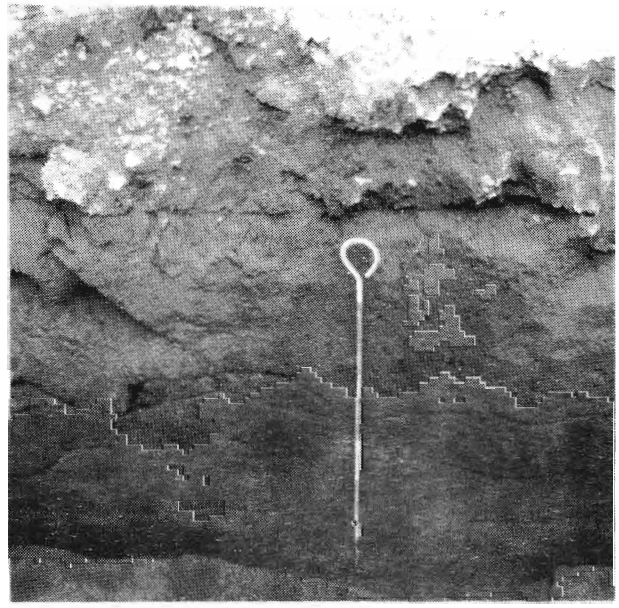


写真４　硬化面の土層断面(最下層)

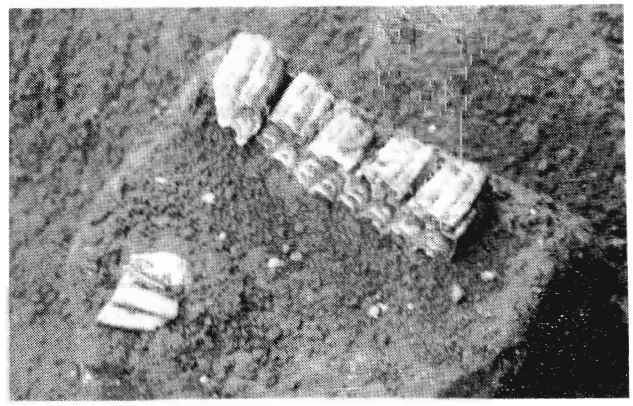


写真５　ＳＤ０４出土の馬の上顎臼歯

写真６　構之内遺跡第３地点から第４地点(▼印)を望む

写真７　山王Ｂ遺跡第４地点の道路状遺構

鎌倉市 史跡 建長寺境内

― 客殿建設用地 ―

宮田　眞

所 在 地　鎌倉市山ノ内８

調査機関　鶴見大学史跡建長寺境内発掘調査団
（団長　大三輪龍彦）

調査担当　宮田　眞・手塚直樹

調査目的　客殿建設に伴う事前調査

調査期間　2000年１月11日～７月11日

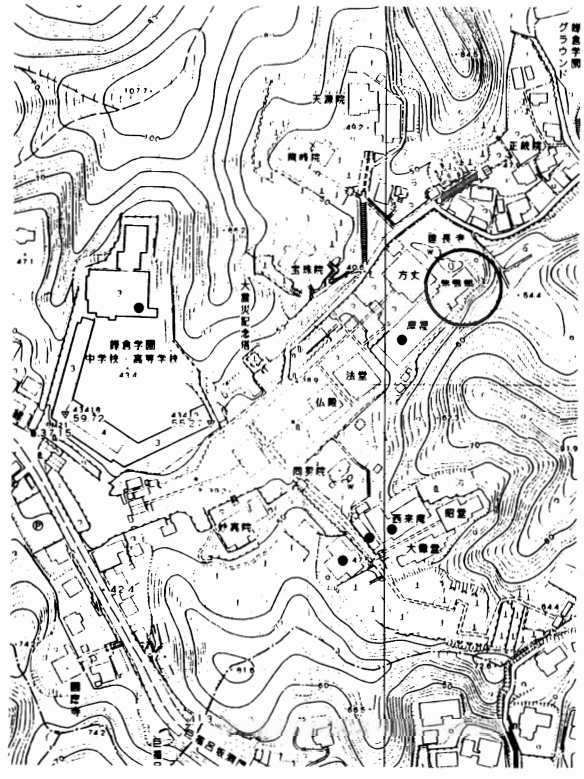
調査面積　780㎡

１．遺跡の立地

本遺跡はその名の示すとおり、鎌倉五山第一位に格付けされる建長寺境内にある。建長寺は県道横浜・鎌倉線の巨福呂坂洞門の北側（北鎌倉側）に所在する寺院で、臨済宗建長寺派の大本山で、建長５年（1253）に開山蘭渓道隆、開基北条時頼によって創建された。

調査地点は紫雲閣跡地で方丈龍王殿の南側に位置しており、山門・仏殿・法堂といった建長寺中心伽藍域の最深部にあたる。

建長寺中心伽藍域では、1986年に大庫裏部分で実施された発掘調査から、元弘元年（1330）の建長寺指図（図２）に記された法堂（千仏閣）の一部を始め、多くの建築遺構が検出されるなど多大な成果を上げた。今次調査区は、その直ぐ背後（東側）に隣接しており、同指図に記された池あるいは得月楼（方丈）・大客殿といった建造物の発見が期待された。



第１図　調査地点

２．調査経緯

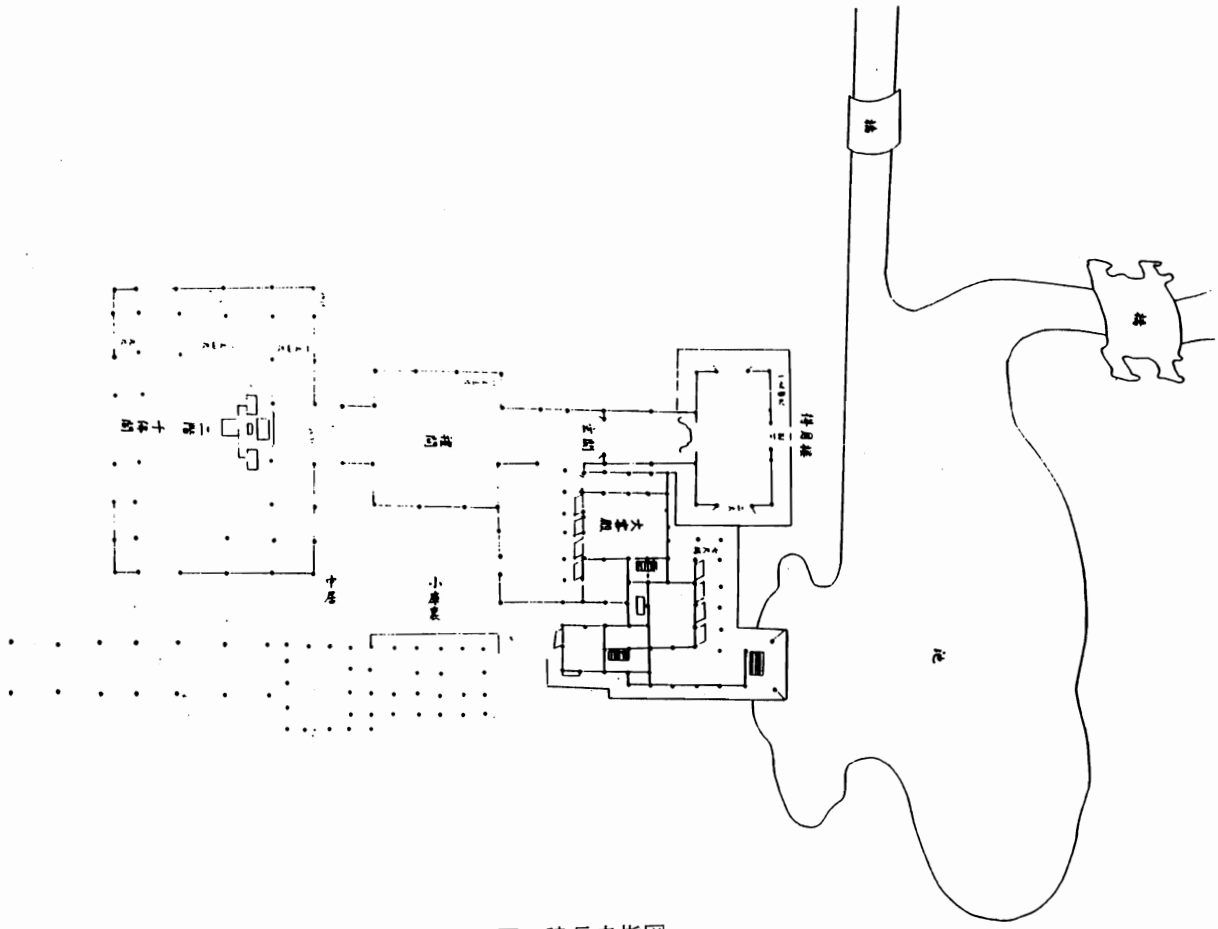
2003年に迎える建長寺創建750年遠忌事業の一環として、建長寺では方丈南東に位置する紫雲閣を取り壊し新客殿の建築計画が持たれた。1999年２月紫雲閣周囲の４ヶ所でトレンチによる試掘調査が実施され、当該地において中世遺物の密な包含層の遺存を確認した。

2000年１月、大三輪龍彦鶴見大学文学部教授を団長に発掘調査団が結成され、紫雲閣跡地において本調査が実施された。

３．調査概要

近代

この時代の検出遺構は、明治頃まで建物があっ



第２図　建長寺指図

たと考えられる鎌倉石切石を地覆とした基壇が１基(現在も一部地上に露呈)。その他に現在方丈裏にある心字池の延長と考えられる池遺構が２時期。池遺構は確実に近世から存続していた。

近世

近世面からは、先述の池遺構の他に近代基壇の同位置下層から礎石建物２棟、井戸跡５基、岩窟遺構(横井戸？)、参道遺構等が検出された。この参道は両側に側溝を持ち、側溝は富士山の宝永噴火のスコリアによって一気に埋められていた。

中世Ⅰ期(14世紀後半以降)

近世層を取り除くと、調査区南西部では岩盤削平面となっており、そのレベルを基準に中世面の広がりを追う。岩盤面からは礎石の遺存は無かったが、一辺1mを超える方形の礎石据え方が間尺２m70cm(９尺)で整然と並んで検出された。また近世池遺構の下層からは、汀線をさらに西方に広げた池(池３)が確認され、鎌倉石切石製の直線的な石垣護岸をもつ。また池の南岸部からは岩盤を掘り残した岬状の突出も見つかった。さらに池覆土中からは、火災後の投げ込みと考えられる炭化物層が４～50ｃｍの厚みを持って堆積していた。炭化物層からは大量の焼失建築材に混ざって、仏具や堂内の金銅製荘厳具、仏像の垂飾や黒漆金箔貼の蓮弁座破片、方丈(得月楼)使われていた漆塗り膳椀揃などを始め種類・量ともに夥しい数の罹災品が出土した。それらの中には堂宇の扉(桟唐戸)の一部なども見られた。

中世Ⅱ期(14世紀初頭以降)

中世Ⅰ期で記した大規模な礎石建物が建立され

た時期で、池南西部(岬の南側)は湾入する。また池の護岸は木製で大路の側溝と同様な?穴をもった土台材が検出された。また２区からは、南北に並ぶ間尺３m90ｃｍ(１丈３尺)を測る鎌倉石製の大型礎石２石が検出され、指図に記された「禮間」あるいは「玄関」に関連した遺構と推察される。中世２期の遺構群は、池の形・建物の規模や配置等から、元弘元年の指図に記された伽藍群の一部に当たっていると考えられる。

中世Ⅲ期(13世紀末・14世紀初頭頃)

１区北西部において、東西に並ぶ鎌倉石切石製の大型礎石４石を検出。さらに調査区外に広がりを持つようだ。間尺は西側から３m90cm(1丈３尺)・３m90cm(１丈３尺)・３m(１丈)を測り、この礎石列から1m50cm南に並行して小型の礎石が補助的に間尺を合わせ東西に並ぶ。礎石上面および周辺地面は、強い火を受け赤黒く焦土化しており、さらに粉砕した瓦片や焦土がそれらを厚く覆っていた。正和４年(1315)の火災か？

中世Ⅳ期(創建期～永仁元年)

この時期１区において建造物はなく、池遺構は中世Ⅲ期の岬先端部以北の範囲に止まる。また池の西岸は鎌倉石切石を５段に積み上げた石垣によって護岸される。２区からは、何れも鎌倉石切石を使用した四半敷、礎石建物等が検出され、調査区外へ平がりを見せる。またそれらは強い火を受けており火災によって焼失したと推察される。

Ⅳ期遺構群は創建期の一連の造営によるものと考えられ、その終末は永仁元年(1293)の大地震の際の火災と考えられる。

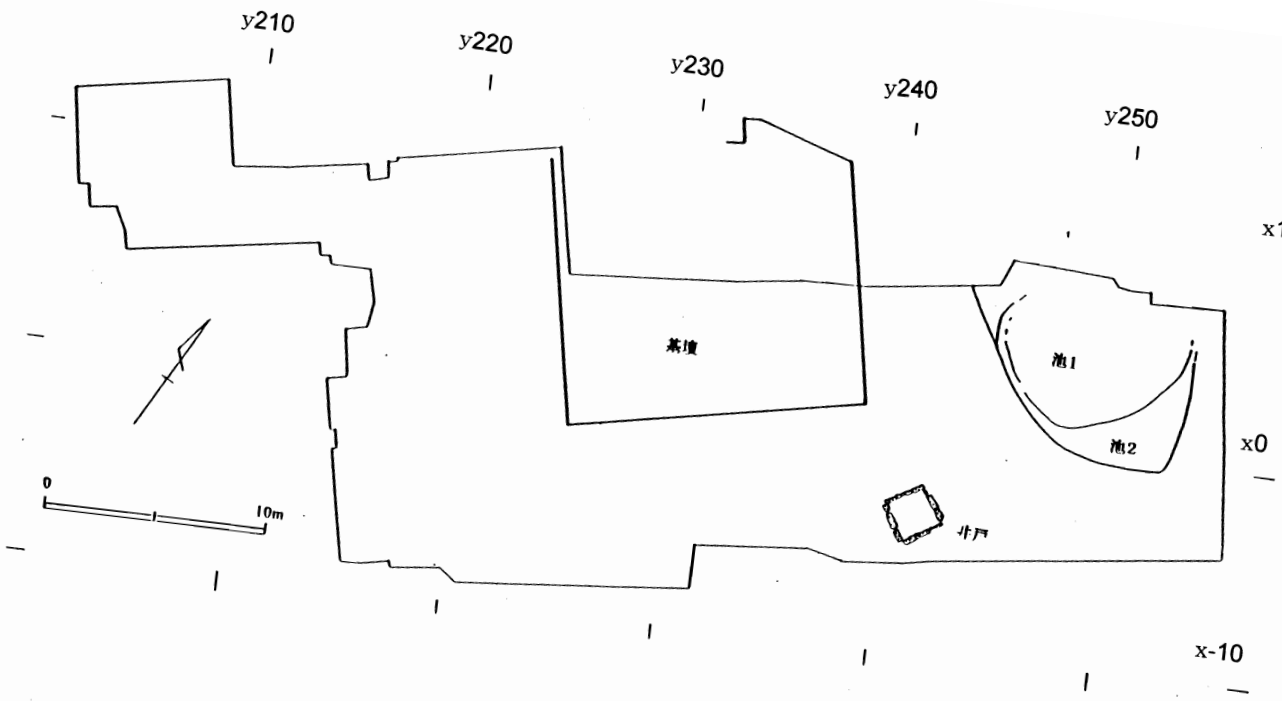
４．終わりに

今回は多大な調査成果を得ることができたが、現在は整理途上にあって十分な考察にはいたっていない。

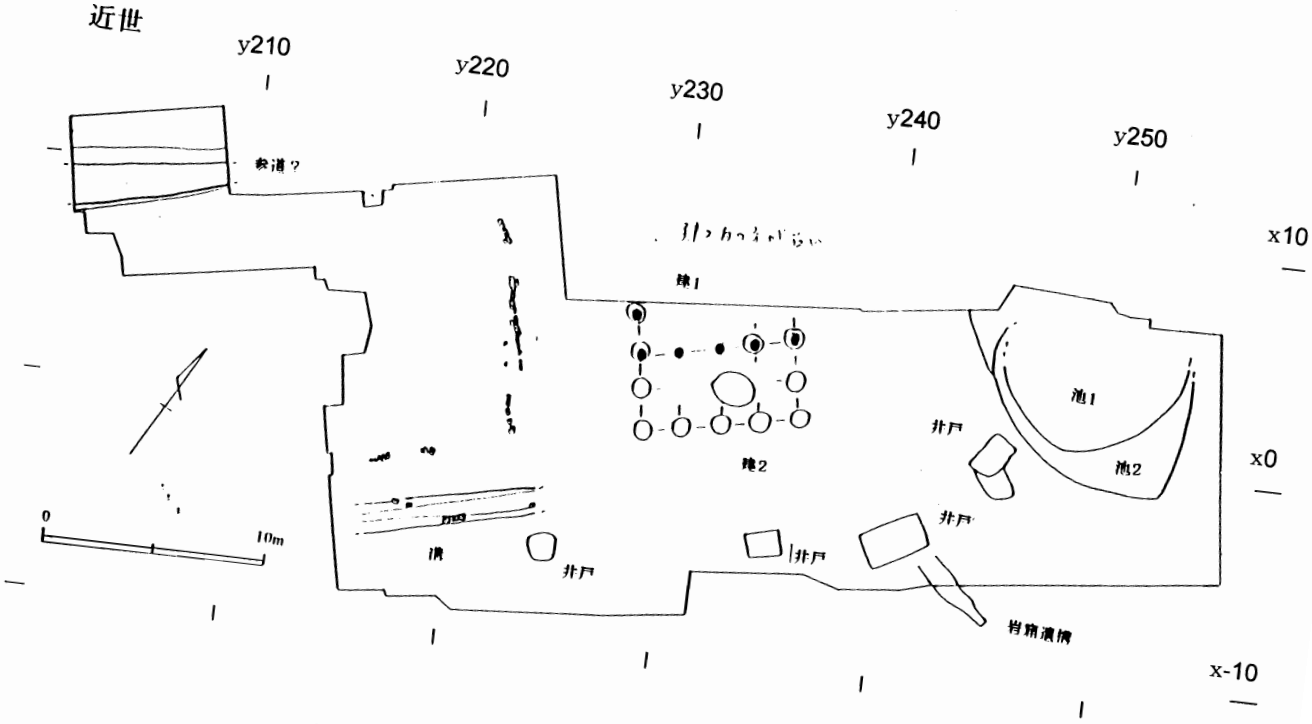
その中で何点かのポイントを挙げるなら,まず建物や庭園(池)などの変遷が、創建期から現代に至るまで連綿として途切れることなく検出できたことであろう。また1986年の調査と同様に、検出遺構(中世Ⅱ期)と元弘の指図の伽藍配置の一部が、整合したことも非常に大きな成果といえる。もう一点は、応永21年の大火の際の火事場整理による罹災品が池から大量に出土したことで、南北朝から室町前期頃にかけての、本山内の僧侶を中心とした人々の活動の様相を知る上で第一級の資料を得たと言えよう。

今回の掲載内容と今後整理作業が進展した段階で出された調査成果との間では、少なからず差異が生ずることが予想される。ご了承願いたい。

近現代

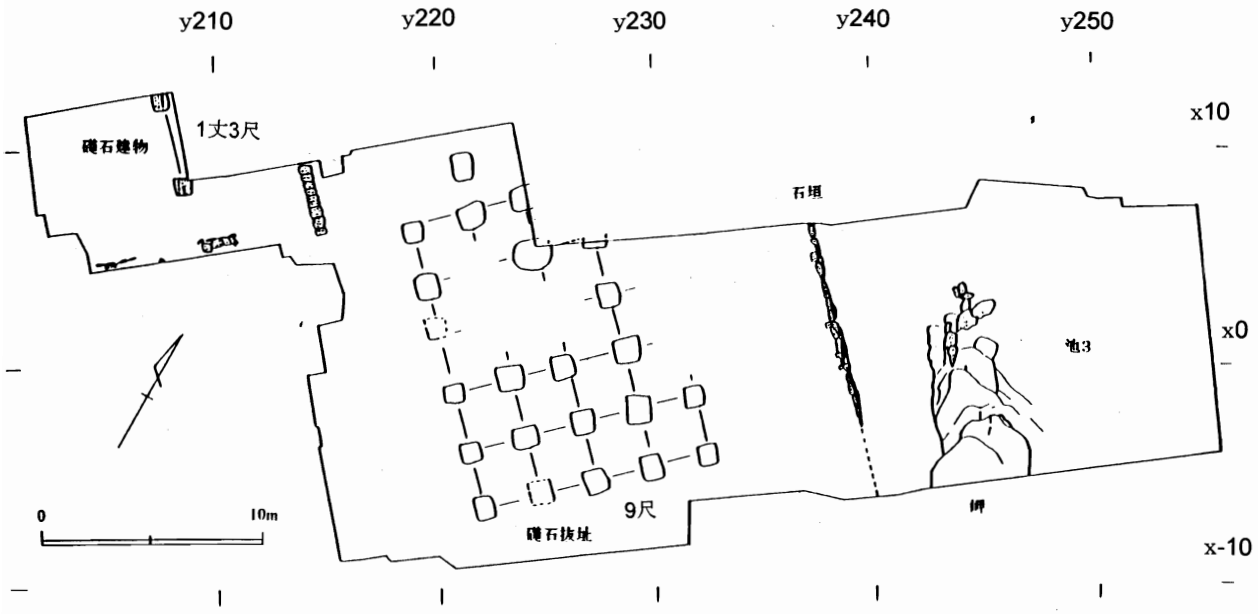


近世

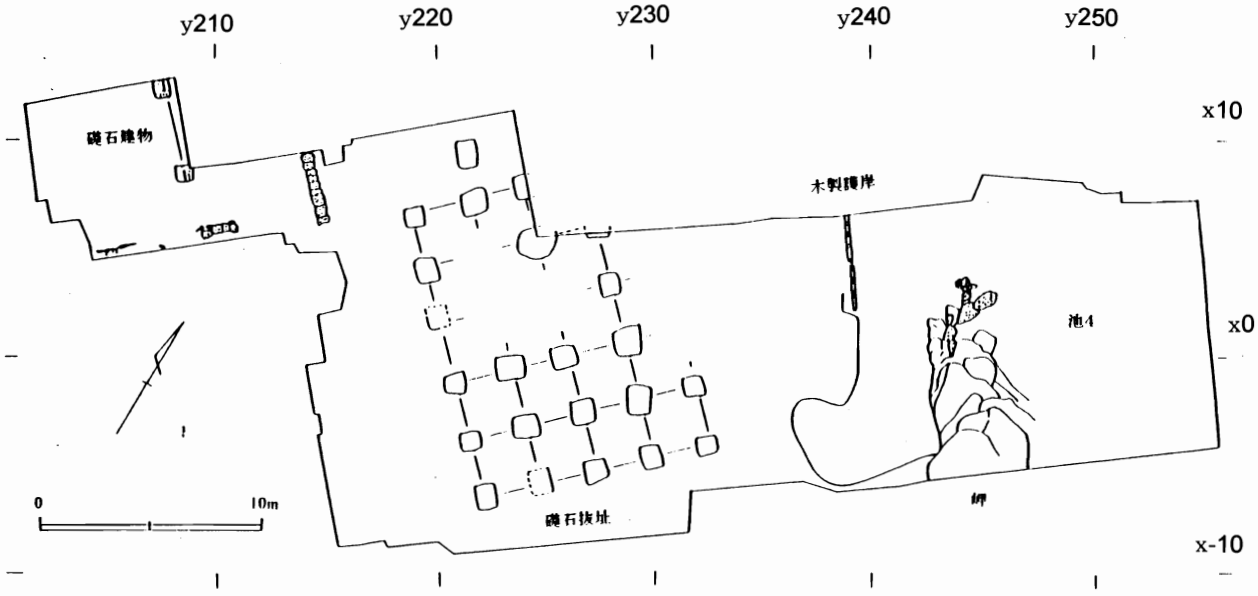


第3図　史跡建長寺境内（紫雲閣）遺構配置図

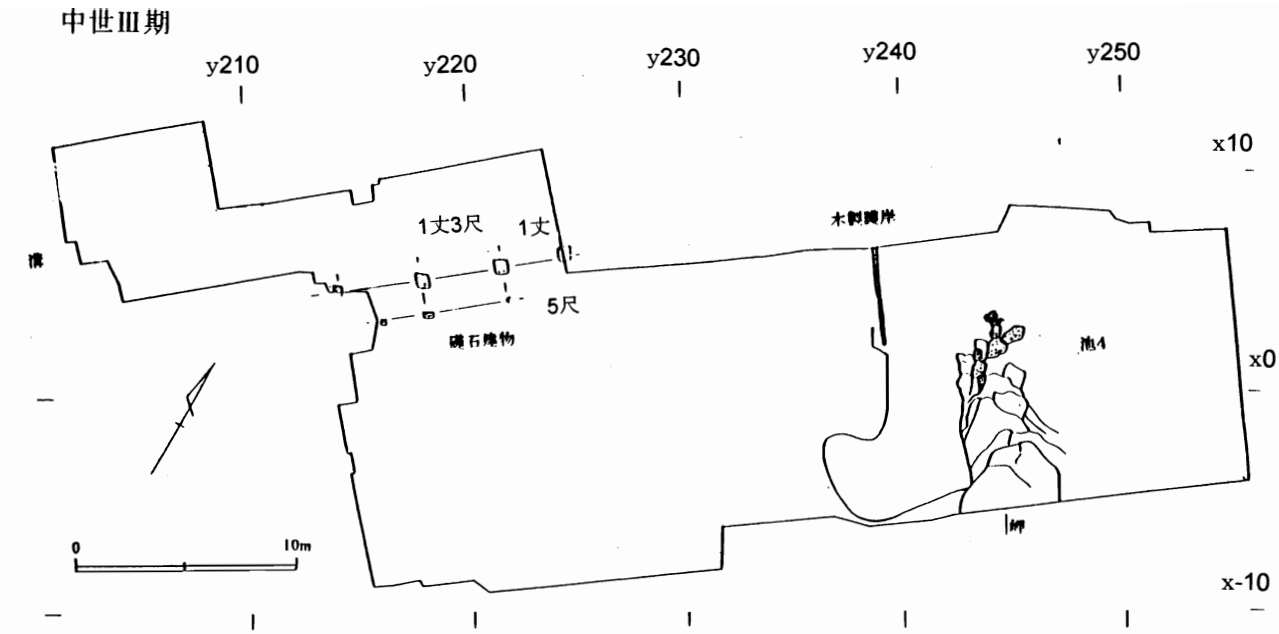
中世Ⅰ期

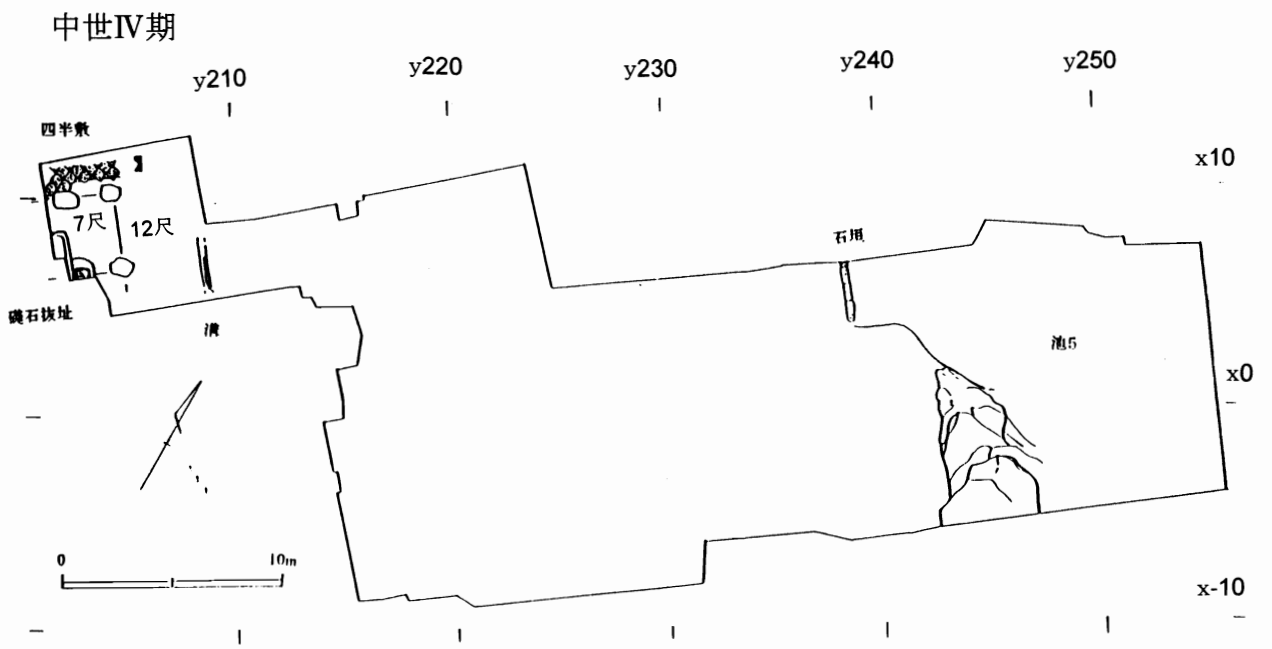


中世Ⅱ期



第４図　史跡建長寺境内（紫雲閣）遺構配置図





第５図　史跡建長寺境内（紫雲閣）遺構配置図

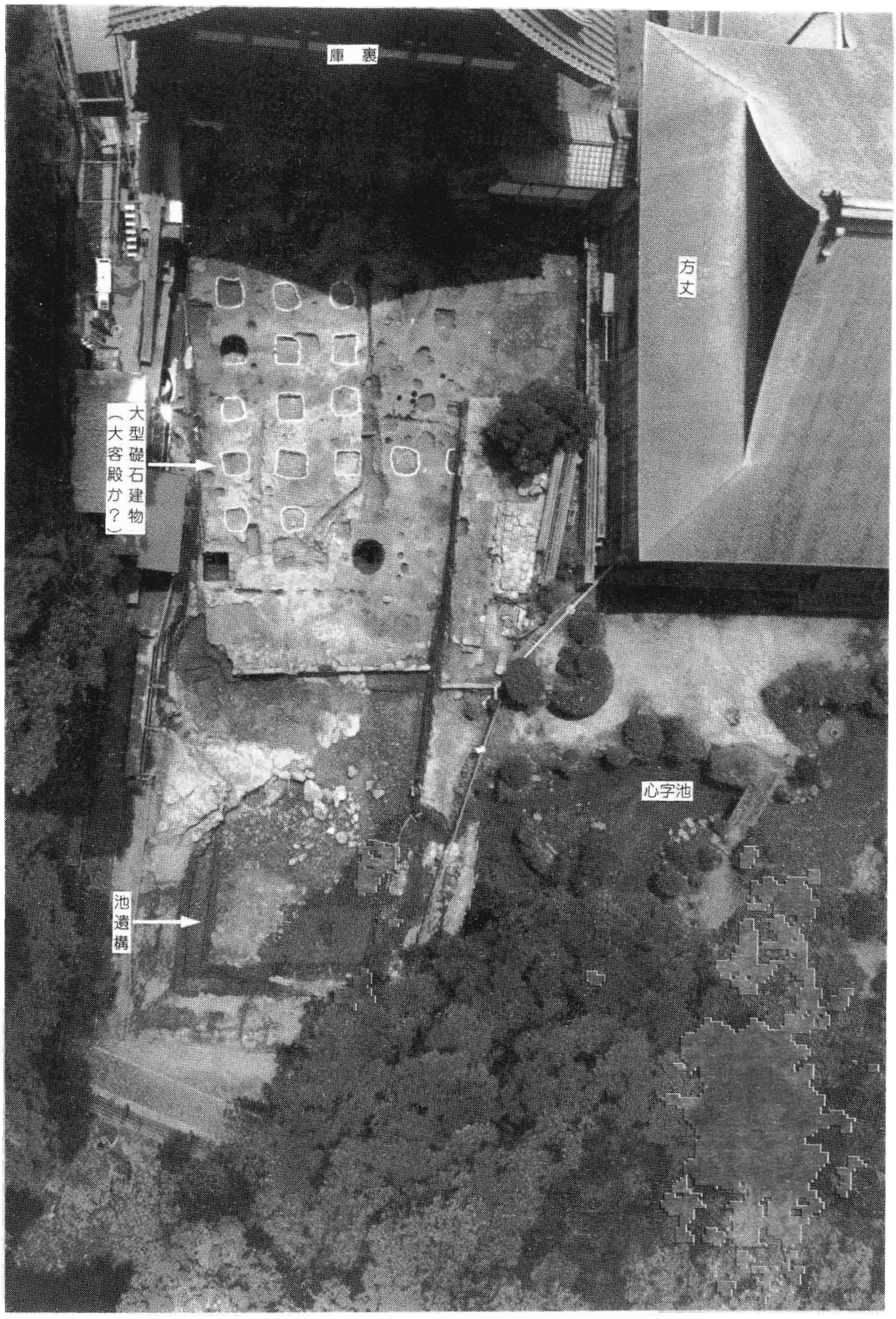


写真1　遺跡全景（上方が西）

平塚市の遺跡概要

― 平塚の地形と遺跡 ―

平塚市教育委員会

1．平塚の地形

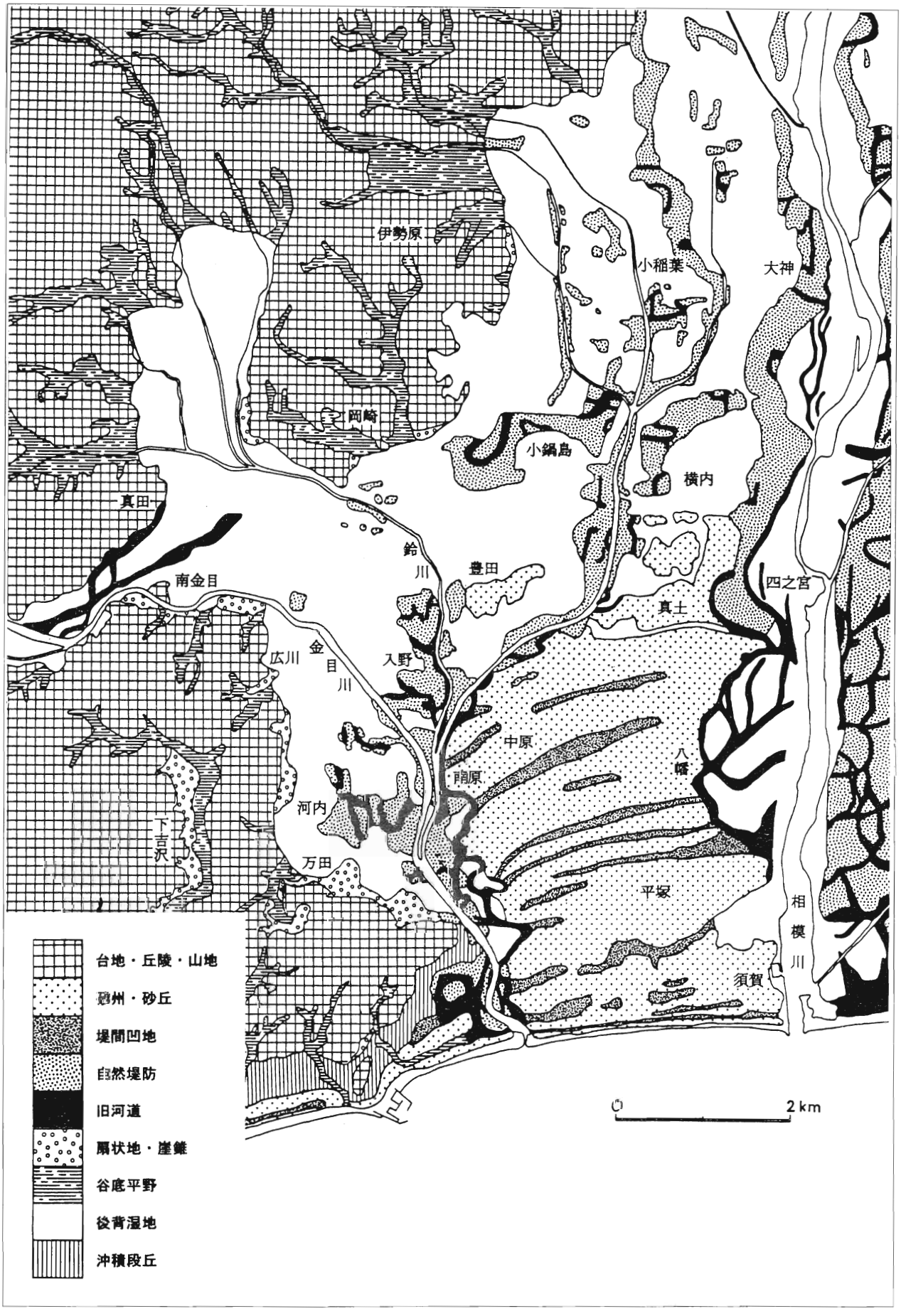
平塚市は相模平野の南部、神奈川県の中央を南に流れる相模川の下流域右岸に位置している。市域の西部は金目川水系に属しており、相模川と金目川に挟まれる砂州・砂丘域に現在の市街地が展開している。これをとり囲むようにして北から北西にかけては丹沢山地南端の伊勢原台地・北金目台地、西には大磯丘陵が分布する。

市域の東半分を占める相模沖積平野は南北に大別され、北部は河成の自然堤防、後背湿地、旧河道が分布し、南部は海成の砂州・砂丘砂丘と堤間凹地が分布している。砂州・砂丘地形は縄文時代中期以降の海退現象に伴って形成されたもので、現在の地形では海岸線に平行して東西方向に延びる12列の微高地と列間の堤間凹地が指摘されている(森1993)。河成の自然堤防・旧河道・後背湿地は相模川・金目川水系の作用により形成されたもので、遺跡立地の好条件をなす自然堤防は相模川右岸、及び金目川・渋田川流域によく発達している。旧河道は自然堤防を縫うように分布するが、砂州・砂丘地帯東部では相模川の旧河道が砂州・砂丘の東縁をえぐるように分布している。

一方、台地・丘陵地帯は伊勢原台地・北金目台地・大磯丘陵の３つに大別される。それぞれが金目川水系の大小の河川に刻まれ、谷底平野・扇状地・沖積段丘等の地形が形成されている。また伊勢原台地西縁や大磯丘陵東縁に見られる急峻な落ち込みは、南北に延びる伊勢原断層に由来するものとして市域の地形を特徴づけている。

第１表　平塚市内の埋蔵文化財包蔵地数と遺跡の種別・時代

立地 ＼ 包蔵地数		沖積低地			台地・丘陵		
		砂州・砂丘 堤間凹地	自然堤防 後背湿地	扇状地	大磯丘陵	伊勢原台地	北金目台地
	２９８	９７	５３	１	１１２	１５	２０
遺跡の種別							
集落址	４６	２４	７	１	９	３	２
古　墳	２５	４	２	０	１５	１	３
横　穴	１５	０	０	０	１２	２	１
城館址	２２	３	２	０	１１	５	１
貝　塚	２	０	０	０	２	０	０
その他	１０	６	１	０	１	０	２
散布地	１８１	６２	４２	０	６２	４	１１
遺跡の時代							
旧石器	４	０	０	０	１	１	２
縄　文	７４	１４	４	１	３７	８	１０
弥　生	８２	３３	１４	１	２０	７	７
古　墳	１９０	６３	２４	１	８３	１０	９
古　代	１３５	７０	１６	１	３１	７	１０
中近世	１５０	６０	２８	０	３２	１５	１５
不　明	３４	５	２０	０	７	０	２



第１図　平塚市域の相模沖積平野の地形分類図（森1993より転載　一部改変）

２．平塚の遺跡

平塚市域の面積は67.88km²を測り、この中に所在する埋蔵文化財包蔵地は現在298か所を数える。遺跡分布の特徴としては、台地・丘陵上には縄文時代から古墳時代の遺跡及び古墳・横穴・城館址が多く、沖積低地には弥生時代以降の遺跡、特に奈良・平安時代の集落の資料の多い点が挙げられる。台帳をもとに遺跡の立地及び種別を表１に示した。

旧石器時代・縄文時代

現時点での平塚市内の旧石器時代資料は少なく、大磯丘陵の原口遺跡、北金目台地の王子ノ台遺跡、真田・北金目遺跡群、伊勢原台地の権現堂遺跡の４例にすぎない。これは厚い堆積土に調査の機会を阻まれることに起因すると考えられ、今後事例は増加すると思われる。

続く縄文時代草創期についても数遺跡が知られるにとどまるが、縄文時代早期にいたって２０遺跡を数え、その分布も大磯丘陵・伊勢原台地・北金目台地の全体に展開するようになる。縄文時代前期になると、万田・五領ヶ台の両貝塚の形成が開始されるのであるが、該期の住居址の検出は未だ無く、定住あるいは集落の形成を知る資料は乏しい。また沖積低地での資料は確認されていない。

中期から後期には両貝塚の形成が本格化するとともに、原口遺跡、王子ノ台遺跡、上ノ入遺跡など、各台地上で大規模な集落址が認められる。

万田・五領ヶ台の両貝塚はいずれも日本の考古学史上大きな意味を持っている。万田貝塚は、大正14年(1925)、東京大学人類学教室のチームが調査を実施し、人類学雑誌誌上で「層位学的な編年研究の先駆として重要な資料」と紹介している。一方、市内唯一の国指定史跡である五領ヶ台貝塚は大正14年～昭和６年に相次いで調査が実施され、出土土器をもとに山内清男は関東の縄文中期初頭の土器形式として「五領ヶ台式」を設定している。昭和47年(1972)に史跡指定された。

沖積低地では、諏訪前Ａ遺跡で完形の縄文時代中期勝坂式の深鉢が出土したのをはじめ、砂州・砂丘域及びその東西の自然堤防上で縄文時代中期以降の土器の出土例が増加しており、早い時期に陸地化していたことは間違いない。今後該期の遺構の検出も考えられる。しかし縄文時代後期後半から晩期の資料は激減してしまう。

弥生時代

砂州・砂丘域の新町遺跡で出土した条痕文系の土器片および、大磯丘陵上の遠藤原Ａ遺跡で発見された条痕文系の壺形土器は、平塚市域への弥生時代の到来を物語るものであるが、いずれも遺構は伴っておらず、遺跡の性格は不明である。集落の展開が本格化するのは中期後半以降といえる。

大磯丘陵内陸部の原口遺跡では、弥生時代後期を中心とする竪穴住居址76、方形周溝墓97を検出。Ｖ字形の断面を持つ溝状遺構は環濠の可能性も指摘されている。原口遺跡の南西に隣接する向原遺跡も含め、ここに大規模な集落が形成されていたことは疑いない。両遺跡とも神奈川県の事業に伴う発掘調査で明らかになったものであるが、北金目台地上の王子ノ台遺跡、真田・北金目遺跡群でもこれと同等あるいは上回る規模の集落、方形周溝墓群が確認されつつあり、また、伊勢原台地上でも権現堂遺跡では方形周溝墓群、赤坂遺跡、桜畑遺跡、上ノ入遺跡等で集落址が確認されていることから、弥生時代後半の各台地上は大規模な集落と墓域が展開していたと考えられる。

一方沖積低地でも、市街地のほぼ中央、現在平塚競技場を含む総合公園が所在する大原遺跡で検出された集落址・水田址は中期に遡る可能性が指摘されている他、中原上宿遺跡群、南原Ｂ遺跡、笹本遺跡で竪穴住居址が検出されており、弥生時代中期以降、沖積低地は確実に居住・生産領域になっている。また、方形周溝墓も坪ノ内遺跡、南

原Ｂ遺跡、本宿Ｂ遺跡等で検出され、低地域内に墓域も形成されていたことが明らかになっている。

古墳時代

市域で最も有名な古墳は、三角縁神獣鏡を出土した前期古墳として知られる真土大塚山古墳であろう。砂丘上に立地する古墳としても特異な存在であるが、残念ながら現存しない。前期の古墳としては他に伊勢原台地の御所塚（御所ヶ谷遺跡）、北金目台地の塚越古墳が挙げられる。御所ヶ谷遺跡では古墳時代前期の範疇で竪穴住居址、円形周溝墓、円墳（御所塚）、方形周溝墓が確認され、弥生時代から古墳時代への変化を示唆している。塚越古墳は永らく５世紀代の前方後円墳と考えられていたが、神奈川県教育委員会の試掘調査によって前期古墳との見方が強まり、墳形も前方後方墳の可能性が指摘されている。

大磯丘陵では現在のところ前期古墳の報告はなく、横穴墓の多い地域として名高い。とりわけ大磯丘陵南東部の万田地区は、平塚市域で初めて考古学調査が行われた学史上も重要な地区である。このとき調査された万田八重窪横穴群をはじめとして、大磯丘陵東南部には市内に15か所ある横穴群のうち12か所が集中している。高塚墳では八塚古墳群で数基が確認されている他は、内陸部に円墳が点在するという認識であった。しかし、広川・公所遺跡群の調査によって６世紀代の所産と見られる円墳の周溝が４基確認され、また円墳と考えられていた市場古墳が前方後円墳と確認されるなど、高塚墳の実態及び横穴墓との関係究明が課題として浮上している。

高塚墳については沖積低地域での資料も増加している。市内の埋蔵文化財包蔵地の中で「古墳」は現在25か所。そのうち沖積低地では砂州・砂丘域に３か所、自然堤防域に２か所の計５か所にとどまっている。しかし、沖積低地では真土地区に昭和前半代まで最大の砂丘列が残っており、各微高地は真土大塚山から西に日和山、三谷山、伊勢山と呼ばれていた。日和山からは須恵器大甕が出土しており、この一帯に古墳群が形成されていた可能性がある他、砂州・砂丘域では円墳と見られる円形周溝の検出例が増えている。大神地区の自然堤防上や石製模造品が採集されている横内地区周辺も注意される。

市内における古墳時代集落の資料は量的に決して多いとは言えないが、前期の遺跡は市域全体に展開する。各台地上の分布はもとより、低地域で自然堤防上や砂州・砂丘北西部の渋田川左岸地域に集中する点は、弥生時代後期から古墳時代前期に至る沖積低地への進出の様相を示唆するものとして注目される。ところが、中期の資料は激減してしまう。この傾向は後期前半まで続き、増加に転じるのは７世紀以降となる。これは砂州・砂丘域における資料の増加が主体をなしており、次代の相模国府造営へとつながる動向を示している。

奈良・平安時代

平塚市内の考古学資料の中で大きなウェイトを占めるのが奈良・平安時代のものであり、特に砂州・砂丘域に集中する国府関連の遺構・遺物は、古代の地方官衙研究の資料としてその重要性は言うまでもない。砂州・砂丘域北東部の四之宮地区周辺には整然と配置された掘立柱建物址群が存在する他、竪穴住居址についてもその密集度は高い。施釉陶器や金属製品の出土量の多さも一般集落とは一線を画しており、和名類聚抄に記される相模国大住国府の国府域として注目されている。近年では、掘立柱建物址群の多い六ノ域遺跡・高林寺遺跡、大型の鍛冶工房址を検出した坪ノ内遺跡、鉄滓・銅滓出土量の卓越する天神前遺跡・神明久保遺跡、「国厨」「旧鼓一」銘墨書土器を出土している稲荷前Ａ遺跡、大量の緑釉陶器片が出土した林Ｂ遺跡等、国府域内における遺跡の性格の相

違が明らかになりつつある。また、構之内遺跡で古代の道路状遺構が確認されたのをきっかけに、その東西で同種の硬化面が確認され、これを官道と推定した上で古代東海道の復元が試みられている。台地上でも大磯丘陵の向原遺跡や北金目台地の真田・北金目遺跡群に見られる大型の掘立柱建物址に「郡衙」を想定する見方もあり、注目される。

中世・近世

中世村落の様相を窺う資料として本宿B遺跡の調査がある。豊田本郷遺跡群として知られているもので、中世後半を主体としている。鎌倉時代の御家人豊田氏の居住地と目される地域であり、居館址の検出には至らなかったものの、青磁・白磁等の出土は富裕な豪族層の存在を示唆している。

城郭関係では伊勢原台地の南部全域を包括する岡崎城が有名である。源頼朝の側近として活躍した岡崎四郎義実が築城したと伝えられる前期岡崎城は、南端の山王久保遺跡付近に主郭があったとされ、室町時代末期に三浦義同が北条早雲に攻撃された際の後期岡崎城は、谷を挟んで北側の台地(現在の伊勢原市無量寺付近)を本丸とし、前期岡崎城を南郭防衛線とした一回り大きなものであったとされている。台地の頂部は土層の削平が著しく、斜面中腹のテラス状の遺構や切り岸状の遺構は中世城郭に関連する遺構と解されている。

沖積低地では、相模川に面した自然堤防域に、鎌倉幕府の重臣三浦氏の館と伝えられる田村館跡があるが、直接関連する資料は得られていない。

近世の資料では徳川家康の命により築造された中原御殿跡の調査で堀の一部、大井戸が検出されている他、東海道平塚宿関係では宮ノ脇遺跡で「西町問屋場」と墨書された土器が出土している。

3．今後の課題と展望

埋蔵文化財の状況把握と分析を行う上で、その立地の持つ意味は大きい。だが、市内の地形区分はあくまでも現在の状況に基づくものであって、原始・古代にそのまま適用できるものではない。注意を要するのは今のところ埋蔵文化財包蔵地の空白地になっている台地周辺部や旧河道周辺の自然堤防・後背湿地域で、大量の河川堆積物によって埋蔵文化財が地下深く眠っていることが考えられる。水田地帯の中に位置する十六町遺跡（沢狭遺跡）で、地表下３ｍで弥生時代中期の遺物包含層が確認されたのは好例といえる。

平塚市の考古学研究の課題として、個別には「相模国大住国府の実態解明」の他、「台地から沖積低地への人々の進出の様相解明」「中・近世の村落、城郭、宿場の調査」等が挙げられようが、すべてに係わる問題として『低地の埋蔵文化財包蔵地の把握』は重要である。

文　献

神奈川県県民部県史編纂室編　1979『神奈川県史　資料編20　考古資料』神奈川県

磯村名男　1967「埋蔵木と平塚市域の砂丘について」『平塚市文化財調査報告書第 7集』

中田　英　1993「古墳時代の集落」『神奈川県の考古学の問題点とその展望』かながわの考古学第３集　神奈川県立埋蔵文化財ｾﾝﾀｰ

見上敬三・奥村　清　1971「相模川沖積低地および湘南砂丘地帯における沖積層とローム層」『神奈川県地盤地質調査報告書』

明石　新　1995「相模国府域の様相－国府域内の集落の分析をとおして－」『考古論叢神奈河第４集』神奈川県考古学会

森　慎一　1993「平塚市域における相模沖積平野の微地形」『自然と文化 16』平塚市博物館

平塚市博物館市史編さん担当編　1998『平塚市史11　別編　考古(1)』平塚市

※ 文献は総記的内容のものに止めた。詳細についてはそれぞれの発掘調査報告書、調査概報を参照されたい。

第25回 神奈川県遺跡調査・研究発表会

発表会担当役員　◎加藤信夫・天野賢一・大村浩司・小池　聡

第25回 神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表要旨

編　集　第25回 神奈川県遺跡調査・研究発表会 実行委員会

発　行　神奈川県考古学会

発行日　2001（平成13）年10月13日

印　刷　アール印刷　TEL　0467-70-8153